

一一 中国人ノ日貨排斥一件 七九一

九六〇

尺 六（一箱八十五反）

此等諸品ハ前表大阪商船会社汽船ノ齊ラセル雜貨ノ一部

ナリトス

名刺用紙類ハ本年七月第二三五号通商公報掲記ノ如ク重ニ
本邦品ナルニモ不拘排貨當時ハ上海香港等ヨリ他国品ノ如
ク変装シテ輸入セラレ居タルガ排貨屏息ノ現況已述ノ如ク
ナルニ加工テ新旧年末年始ノ期節ニ際会シタルヲ以テ在留

三元内外

邦商トノ間ニ商談行ハレ最近大約四十万枚内外ノ輸入アル
見込ナリ名刺ハ支那固有ノ赤色大形ノモノ漸次減退シ外國
風小形品ノ需要次第増加スルノ傾向ニアリ幅一寸五六分
縦二寸七八分（我曲尺）ノ格安モノ最モ需要多ク紅色ノモ
ノハ其需要白色ノ次位ニ在リ

事項一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ對滿施策ニ關スル件

七九一 五月二十八日 中村関東都督ヨリ

加藤外務大臣宛

満蒙開発ニ關スル意見書送付ノ件

附屬書 五月二十八日付満蒙開発ニ關スル意見書

（六月三日接受）

満蒙開発ノ急務ニ關シ別冊意見書及提出候也

大正四年五月二十八日

関東都督男爵 中 村 覚（印）

外務大臣男爵 加藤高明殿

總理大臣ヘハ別ニ提出致置候間申添候

（附屬書）

満蒙開発ニ關スル意見書

今日支交渉新三成リ滿蒙ニ於ケル邦人發展ノ基礎茲ニ確
立ス此時ニ當リ國家百年ノ大計ヲ立テ植民政策ノ基本ヲ定
メ基ノ実果ヲ我ニ收メムトスルニハ幾多ノ施設經營ヲ要ス
ルモノアリト雖就中鐵道ノ敷設ト拓殖銀行ノ設立トハ貞ニ
焦眉ノ急務ニシテ是レ利權伸張ノ要具、滿蒙開拓ノ先驅ナ

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ對滿施策ニ關スル件

七九二

九六一

リ政府ハ速ニ審議ヲ加ヘ之カ實行ノ法ヲ講セラレムコト切
望ノ至ニ堪ヘス敢テ意見ヲ提出ス

大正四年五月二十八日

関東都督男爵 中 村 覚

鐵道敷設ニ關スル意見書

曩ニ政府ハ支那政府ト協訂シテ滿蒙五鐵道ニ關スル權利ヲ
收ム今聞ク所ニ拠レハ四平街鄭家屯間に於ケル鐵道敷設ニ
就テハ既ニ其ノ成案ヲ得タルモノノ如シ此際速ニ之ヲ實行
シ続テ洮南府ニ至ルノ延長計畫ヲ立ツルコト是レ滿蒙開發
ニ關スル最大急務タリ
思フニ東蒙ノ永ク草昧ニ属シ未開ノ域ヲ脱セサル所以ハ種
々ノ關係アリト雖主トシテ道路駆通其他完全ナル交通機關
ノ備ラサルニ因ル今若シ鐵道一貫セハ曠漠タル山野ハ忽チ
活氣ヲ生シ自カラ農商工業ノ勃興ヲ促スニ至ラム世界各國
ノ植民地ニ於テ隆々タル發展ヲ見ルモノハ一二鐵道敷設ノ
効果ナリト謂フヘシ其ノ實例昭々枚挙ニ違アラサルナリ
東蒙ニ於ケル鐵道ノ必要ト南滿ニ於ケル既成鐵道ノ効果ト

ヲ実証セムカ為ニ東蒙ニ三ノ市場ニ於ケル物価表、運賃表及南満洲鐵道成立前後ニ於ケル輸出總額表ヲ添付シ以テ参考ノ資ニ供ス

第一

普通貨客車賃ノ一例 第二表

地名	距離	貨物每百斤一週貿易量					
		冬	季	夏	季	冬	季
自四平街 至洮南府	二三里	日行 程	貨金行 日	日行 程	貨金行 日	日行 程	貨金行 日
	三五里	日	錢	日	錢	日	錢
	六						
自四平街 至遼寧鎮	五里	三一三三、七〇	九一〇三、八〇	六一八	九一三〇、一六	九一三〇、一六	九一三〇、一六
		日	錢	日	日	日	日
自四平街 至洮南府	四六里	九一三	八一〇二、三一	九一三〇	九一三〇、一六	九一三〇、一六	九一三〇、一六
		日	日	日	日	日	日
南滿洲ノ總輸出高	二千二百十萬円	二千二百二十萬円	二千七百三十萬円	八千百九十万円	八千百八十八萬円	八千百八十八萬円	九千八百八十八萬円

正金銀行ヲシテ特殊貸付業務ヲ開始セシム然レトモ若替銀行ヲシテ拓殖的金融業務ヲ兼掌セシムルハ過渡期ニ於ケル一時ノ便法ニシテ決シテ永遠ノ策ニ非ス宜ナル哉特殊貸付開始ニ依リ流動資金ヲ潤沢ナラシメタル効果ハ之ヲ認メ得ヘキモ直接企業ヲ指導啓発シタル効果ハ微々トシテ挙カラス

政府ハ拓殖銀行ノ株式五万株ヲ引受クルコト
満鉄会社ハ拓殖銀行ノ株式一万株ヲ引受クルコト
拓殖銀行ノ株式三万株ハ日支両国人ヨリ之ヲ募集
ト
セシム

政府ハ拓殖銀行ノ株式五万株ヲ引受ケルコト
満鉄会社ハ拓殖銀行ノ株式一万株ヲ引受ケルコト
拓殖銀行ノ株式三万株ハ日支両国人ヨリ之ヲ募集スルコ
ト
二拓殖銀行ハ正金銀行ノ特殊貸付業務（五百萬円）ヲ繼承
セシム

惟フニ満蒙ノ地ハ經濟事情ノ發達セル地方ト異ナリ事業ヲ
計画スル者ハ多クハ冒險者又ハ薄資者ニシテ著実穩健ナル
事業家ノミヲ招徠セムトスルモ得ヘカラサルナリ故ニ先ツ
金融ノ便ヲ開キテ事業ノ勃興ヲ促スニ非サレハ到底利權獲
得ノ実果ヲ收ムルコト能ハサルヘシ政府ハ此際拓殖銀行ヲ
設立シ本店ヲ奉天ニ置キ満蒙ノ事情ニ精通シ拓殖の材幹ア
ル者ヲ以テ重役ト為シ一意專心其ノ使命ヲ完ウスルニ努力

三拓殖銀行ノ業務左ノ如シ
一三十箇年以内ニ於テ年賦又ハ定期償還ノ方法ニ依リ不動産又ハ不動産ニ関スル権利ヲ抵当トスル貸付
二満洲蒙古ノ拓殖ヲ目的トスル株式会社ノ株券、債券ヲ質トスル貸付及其ノ社債券ノ応募、引受
三為替、荷為替及満洲蒙古ノ產物ヲ担保トスル貸付
四二十人以上ノ農業者又ハ工業者ノ団体ニ対スル無担保貸付

拓殖銀行ハ正金銀行ノ特殊貸付業務ヲ繼承シ正金銀行及満鉄会社ト相倚リ相援ケテ拓殖ノ実果ヲ收ムルヲ要ス左ニ其ノ組織、方法ヲ開陳ス

五法令ノ規定ニ依リ設定シタル財團ヲ抵当トスル貸付
六公共団体ニ対スル貸付
七預り金及保護預り

拓殖銀行ノ資本金ヲ一千万円トス株式金額ヲ金一百円トシ
十万株ニ分ツ

七九二

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

七九三

スル意見書

九六四

四拓殖銀行ハ金十錢、金二十錢、金五十錢、金一円、金五
円、金十円及金百円ノ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

五拓殖銀行ハ払込資本金ノ十倍ヲ限り債券ヲ發行スルコト

ヲ得

前項ノ債券ニハ海外ニ於テ募集スル場合ニハ割増金ヲ附
スルコトヲ得

債券ノ額面金額ハ金五円以上トス

六拓殖銀行ニ總裁一人理事三人以上及監事二人以上ヲ置ク

總裁ハ政府之ヲ命シ理事ハ株主總会ニ於テ選舉シタル二

倍ノ候補者中ヨリ政府之ヲ命ス

監事ハ株主中ヨリ株主總会ニ於テ之ヲ選任ス

七拓殖銀行ハ政府以外ノ株主ノ払込金額ニ對シ年八分以上

ノ配当ヲ為スニ非サレハ政府ニ對シ配当ヲ為サス

註 本意見書ハ六月下旬閣議ニ於テ供覽ニ附セラレタリ

七九三 六月二十二日 閣議供覽

中村滿鉄總裁提出ノ満蒙經營ニ關スル心得要旨

旨閣議供覽ノ件

附 屬書 右心得要旨

附記 中村滿鉄總裁ヨリ大隈總理大臣宛満蒙開發ニ關

各大臣

内閣書記官長

内閣書記官

南滿洲鐵道株式會社總裁男爵中村雄次郎提出満蒙經營ニ關

スル心得要旨

右閣議ニ供ス

(欄外註記)

「供
覽」

(附屬書)

極秘

満蒙經營ニ關スル心得要旨

滿蒙ニ對スル帝國ノ國是ハ夙ニ相定リ居候儀ト奉存候得共

今回ノ日支新協約成立ト共ニ愈々以テ確定不動ト相成候ニ

就テハ今後官民一致提携シテ既定ノ大方針ニ從ヒ永久抜ク

ヘカラサル根基ヲ奠定スルノ時機ニ相達シ候事故特種ノ使

命ヲ負フテ創立セラレ候吾力南滿鐵道會社ハ國威ノ宣揚ト

相伴ヒ自己ノ責任ノ更ニ重キヲ加ヘ候事ヲ自覺致シ将来全

力ヲ傾注シテ与ニ十全ノ報効ヲ圖ラサルヘカラサルハ槩說

ヲ待タサル所ニ候處然ラハ如何ニシテ将来帝國ノ獲得シタ

ル利權ヲ實際ニ施シ行フヘキカト言フニ至リ候テハ世間多
少ノ議論可有之モ事業計画トシテハ未タ佩服スヘキ正確ナ
ル成案アルヲ聞カス却ツテ漫然多少ノ資本ヲ懷ニシ志拓殖

ニ篤キ輩ハ宜ク蹶起シテ満蒙ノ野ヲ踏破スヘシト慾漁スル

ニ過キサル如キハ近頃遺憾ニ被存候現ニ昨年青島陥落後所

謂空拳ノ徒潮ノ如ク新占領地ニ入込ミ何等為スナクシテ忽

チ生活ニ窮シ候事実ニ鑑ミ候テモ今後満蒙ニ於テ同様ノ醜

状ヲ呈露致候コトモアラハ國家ノ品位及ヒ信用ヲ毀傷候コ

ト甚シト憂慮致候ニ付将来苟モ満蒙ニ於ケル開發的事業ニ

従ハントスル者ハ鉱業農業乃至牧畜等其ノ何タルヲ問ハス

必ス相当ノ資本ヲ備ヘ大規模ヲ以テスルニアラサレハ十分

ノ成功ヲ望ムヘカラサルハ申迄モ無之儀ト存候且ツ勞役ニ

闕シ候テハ寒暑ノ氣候ニ耐ヘ最低ノ生活ニ満足スル支那人

ノ長トスル所ニ候得ハ巧ニ之ヲ使役シテコソ經濟上ノ妙味

モ相顯ハレ候コトニテ實際無資力ナル邦人ノ此ノ間ニ處シ

テ活動シ得ヘキ余地アリトモ覺ヘ不申果シテ然ラハ邦人力

今回享有シタル利權ヲ完全ニ活用セント欲スルトキハ是非

トモ夫々十分ノ資本ヲ要スヘキコト再言ヲ須キサル次第二

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

七九三

九六五

言ヲ要セサル所ニ御座候但シ南滿鉄道ヲ解スルニ单ニ一個當利会社ヲ以テスルトキハ滿鉄自体ノ利益ノ為ニハ余り力ヲ他事ニ分ツノ労多クシテ功少ナキハ賭易キノ理ニ有之從来トテモ營業事項ニ抵触セサル範囲内ニ於テ多少資金融通致候場合ニ於テモ一方ニハ動モスレハ利益壟斷ノ咎ヲ滿鉄会社ニ及ホサントスルモノアルト同時ニ他方ニハ種々ノ美名ヲ構テ資金貸与ノ恩恵ヲ求ムルモノ統出致候有様ニテ会社トシテハ常ニ其ノ取捨ニ苦ミ殆ト煩累ニ不堪候得共苟モ特殊ノ使命ヲ帶フル國家の機関トシテハ強チ疎外致シ難キ場合モ不少依テ仮ニ不肖カ滿鉄總裁タル地位ヲ離レ國家將來ノ利害タル大処ヨリ達觀致候トキハ南滿鉄道以外ニ別個ノ機関ヲ起シ滿鉄会社トハ單ニ兄弟關係ヲ保持セシムルニ止ム如キハ到底統一アル經營ノ機能ヲ全クスル所以ニ非ス

ト確信致候次第三御座候

但シ大体ノ方針ハ滿鉄中心ヲ可トスルモ現在会社ノ財政状態ヲ以テシテハ政府ノ認許セラレタル社債二千万円ハ歐洲戰乱ノ影響ヲ受ケテ近ク募債ノ見込ミ相立チ不申上ニ本年

度ニ要スル興業費六百万円ノ財源ニ付テモ一時借入金ニ賴ルヘキカ將夕払込ニ待ツヘキカノ点スラ未定ノ場合ニ付既

大正四年六月

男爵 中村 雄次郎

(附記)

中村滿鉄總裁ヨリ大隈總理大臣宛

滿蒙開發ニ關スル意見書

謹ミテ按スルニ我カ南滿洲鐵道株式会社ハ運輸採鉱ノ如キ直接ニ利益ヲ収メ得ヘキ事業ノ外、特ニ滿蒙開發ノ為ニ必

要ナル諸多ノ施設ヲ完クスヘキ責務ヲ有スルヲ以テ我カ会社ハ國家及ヒ社会ニ對スル地位ニ鑑ミ日夕之カ講究ヲ懈ラ

ス而シテ近者帝国ノ對支關係其ノ面目ヲ新ニスルニ於テ我カ会社ヲシテ更ニ自己使命ノ重キヲ感シ痛切考慮ヲ加ヘシムルニ至レリ

經濟方面ニ於ケル所謂滿蒙開發ノ要ハ滿蒙ノ地ト人トヲ富マシムルニ在リ蓋シ滿蒙致富ノ途ハ農工商ノ各業ニ亘リ懇切指導シ且ツ獎励シテ以テ之カ改良發達ヲ遂ケシムルニ存スルヤ言ヲ俟タヌ我カ会社ハ深ク意ヲ此ニ注キ一切ノ施設ヲ試ミツツアルモ更ニ時局ノ進転ニ伴ヒ少クトモ左記ノ事項ヲ緊急実行スルノ要アルヲ認ム

第一 鉄道ノ増設

凡ソ産業振興ノ第一歩トシテ先ツ講セサルヘカラサルハ運輸機関ノ普及是レナリ鐵道ニシテ成ランカ百般ノ産業自然ニ興ルヘシ

今滿蒙ニ在リテ新ニ敷設セラルヘキ線路數多アリ中四平街鄭家屯線ノ如キ已ニ大体ノ議ヲ經タルアリト雖開原海龍線、奉天四平街間ノ複線及鄭家屯以西開魯ニ至ルノ線ノ如キ極メテ急要ナルヲ以テ最先ニ着手セサルヘカラサルモノ

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

七九三

九六七

我カ農業者ヲ滿蒙ニ移シ耕作ニ從事セシムルハ國家的實力ヲ植ウル所以ニシテ素ヨリ緊要ノコトニ屬スト雖世上伝フル如ク無資ノ農民ヲ移住セシメ勞働ヲ以テ支那人ト相競ハシメントスルカ如キハ其可ナルヲ見ス其ノ他邦人ノ滿蒙ノ地ニ産業ヲ興サンツスル者ハ其ノ何種ノ事業タルヲ問ハス必ス相当ノ資本ヲ有スルモノナラサルヘカラス單ナル小作農ヲ誘致スルカ如キハ戒メテ避クルヲ要ス

右等相当ノ資本ヲ有シ農耕ニ從事セントスル者ニ対シテハ、我カ会社ハ努メテ必要ナル援助ト便宜トヲ与ヘ及フ限り其ノ移住ヲ獎勵セントス例へハ鉄道附屬地外ノ耕地ノ如キ地価甚タ廉ナラサル場合アリ故ニ我カ会社ハ時ノ宜キヲ察シ予メ格安ナル耕地ヲ買收シ置キ必要ニ応シテ之ヲ移住者ニ譲渡セントスル如キ即チ其ノ一法タリ

第三 工業上ノ指導獎励

農業カ滿蒙開発上重要ナル事項ナルハ勿論ナリト雖邦人ニ依リテ企画セラルヘキ事業トシテ工業ハ更ニ重要有望ニシテ且ツ吃緊事ニ属スルヲ以テ今後一般ニ此ノ方面ニ対シテ十分ノ力ヲ傾注スルノ要アリ

工業ニ関スル我カ会社ノ施設トシテハ左ノ二件ノ如キ最モ急要ナリトス

(一) 中央試験所ノ拡張

由來中央試験所ハ産業開発ノ目的ヲ以テ我カ会社カ銳意經營スル所ニ係リ現ニ滿洲特殊工業ニ属スル試験ヲ行ヒツツアルモ更ニ規模ヲ拡大シテ凡ソ滿洲ニ原料ヲ有スル工業及ヒ原料ナキモ動力及ヒ労銀ノ關係ニ由リ苟モ滿蒙ニ於テ興リ得ヘシト認メラルモノハ悉ク調査研究ヲ遂ケ其ノ結果

營業トシテ實際ニ行ヒ得ヘシトスル事業ハ直ニ之ヲ他人ノ經營ニ移シテ獨立事業為ラシムヘシ若夫レ工業ノ見地ヨリ云ハハ滿蒙地方ハ之ヲ帝国ノ一部ト看做シ帝国内ニ於テ現ニ行ハル工業ト雖自由ニ之ヲ經營セシメサルヘカラス斯ノ如クニシテ始メテ各般ノ工業隆然トシテ振起スヘシ尤モ之カ製品ハ主トシテ支那南洋其ノ他海外各地ニ販路ヲ求メシムヘキハ勿論ナリトス

(二) 撫順ニ於ケル発電所ノ規模拡張
撫順石炭ハ「マンド」瓦斯ヲ作ルニ適スルヲ以テ之ニ由リテ最廉価ナル電力ヲ起スヲ得渾河ノ水量亦大ナルヲ以テ撫順一帯ノ地域ハ将来滿蒙ニ於ケル工業ノ中枢地タラシメサルヘカラス

第四 鉱山ノ調査

滿洲各地ニ於ケル炭坑其ノ他鉱山ニ関スル調査ハ我カ会社カ夙ニ留意努力スル所、今後一層周到ナル調査ヲ行ヒ同時ニ之カ採掘ノ計画ヲ立テ其ノ有望ト認ムルモノハ成ルヘク他人ヲシテ之カ經營ニ任セシメントス

第五 鞍山站附近製鐵所ノ設置

鞍山站附近一帯ノ鉄鉱ハ含鉄量多カラスト雖鉄鉱甚タ豊富

ナルノミナラス水量亦大ニシテ且ツ運搬至便ナルヲ以テ大製鉄所ヲ起スニ適ス我カ会社ハ早ク此ニ着眼シテ之カ調査ヲ進メ今現ニ採掘出願中ニ係ルヲ以テ許可ヲ得ハ直ニ大製鉄所トシテノ計画ヲ立て實際ニ於テハ先ツ以テ大製鉄所ヲ起シ漸次拡張シテ終ニ一大規模ノ製鉄所ヲ同地方ニ經營セントス

第六 本社ノ移転

國運ノ興隆ト時局ノ進移トニ伴ヒ我カ会社ノ責務益々重大ヲ加ヘントス而シテ此ノ重大ナル責務ヲ尽サントスルニ当リ本社ヲ滿洲ノ首腦タル奉天ニ移スノ必要ハ我カ帝国ノ經濟的發展ト國權ノ扶植トニ稽ヘ愈々緊切ニシテ猶予ヲ許ササルモノアルヲ見ル之カ移転ノ為ニ要スル所ノ費巨額ナルヘシト雖今ニ於テ断行セズノハ必ス異日噬臍ノ悔アルヘシ

政府配當金ノ免除ニ就キテ

我カ会社各般ノ事業ハ略ホ其ノ基礎的施設ヲ了ヘタルカ如シト雖之カ施設ヲ完クシ各々其ノ機能ヲ十分ニ發揮セシメントセハ仍未巨多ノ投資ヲ辞スヘカラス試ニ之ヲ概言センニ大連築港及ヒ埠頭ノ改良完備ヲ計ルハ滿蒙産業ノ發達ヲ國ル所以ニシテ港内ノ浚渫、防波堤ノ築造、岸壁ノ修築ヨ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

七九三

五六九

リ埠頭ノ増築改修、埠頭陸上ノ諸設備等ニ至ルマテ急施ヲ要スヘキモノ少シトセス又鉄道ニ在リテモ線路ノ改良、車輛ノ增加等焦眉ノ急ヲ告クルモノアリ更ニ撫順炭坑ニ於ケル設備ノ完成、附屬地ニ於ケル医院、学校等ノ增補的設備ヲ要スルモノ等其ノ避クヘカラサル事業多々ニシテ凡ソ此レ等ノ事業ハ皆速ニ完成セサルヘカラサルモノニ属シ之ニ要スル費額并ニ前記各事業ノ費額ヲ合計キハ概算九千万円ノ巨額ニ達スヘキ見込ナリ仮ニ今後六箇年繼續事業トセハ即チ毎年千五百万円ヲ要スヘクシテ之ニ対シ我カ会社ノ有スル財源ハ既募集未払込ノ株金三千二百万円、未募集株金四千万円計七千二百万円ニ過キス此ノ外毎年營業益金中ヨリノ特別積立金見込額二百五十万円ヲ流用スルトキハ此ノ六箇年分計金一千五百万円ニ達スヘキヲ以テ此ノ總計金額ヲ以テ略ホ上記各事業ノ完成ヲ庶幾シ得ヘキ計算ナリ

而シテ前記資金ノ調達方法ハ株金ノ払込ニ依ルヘキカ或ハ之ヲ外債ニ待ツヘキカハ時ノ狀況ニ依リテ決セサルヘカラサル問題ナルカ歐洲大戰正ニ闘ナルノ時果シテ何レノ日ヲ待チテ外國市場ニ募債スルヲ得ヘキカ既ニ外債ノ望ミ近キ将来ニ繋クヘカラストセハ低利ノ内債ヲ求メ得ル場合ハ格

一一 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

七九四

九七〇

別然ヲサル限りハ結局株金ノ払込ニ頼ラサルヘカラス此ノ場合ニ於テハ株主ニ対シ年八分ノ配当ヲナササルヘカラサル苦痛アルニモ拘ラス前來列舉スル各事業ハ終局相当ノ利益ヲ挙ケ得ヘキモノニアラス故ニ能ク毎年ノ純益ニヨリテ

六月二十三日 白仁關東都督民政長官ヨリ
松井外務次官宛

奉天省將軍及巡按使ノ任命ハ予メ日本側ニ協

議セシムルヲ要スル旨意見具申ノ件

附屬書 右意見書

(六月二十八日接受)

此ノ配当ヲモ為シ得ルヤ否ヤハ逆メ料知シ易カラス幸ニ營業狀態好順ニシテ利益金ヲ以テ之カ支弁ニ堪ヘ得ル場合ハ

論ナシト雖若然ルヲ得サルトキハ政府ハ或ル期間其ノ持株ニ対スル配当金ヲ免除セラルノ承認ヲ予メ与ヘラレントヲ切望セサルヲ得ス是レ会社本然ノ営業ニ属スル事項以外、特殊ノ使命ヲ負フテ國家ニ代リ満洲開発ニ属スル諸多ノ施設ニ任スル我カ会社トシテハ國家永遠ノ利害ヨリ考慮シ万止ムヲ得サルニ出ツルモノナルヲ諒察セラルヘキヲ信ス

以上叙述スル所ノ方針ニ対シ亟ニ廟議ヲ尽サセラレ何分ノ

下命ヲ請フ爰ニ事情ヲ具シ伏シテ高裁ヲ仰ク

大正四年十一月

南滿洲鐵道株式会社總裁男爵 中村 雄次郎

内閣總理大臣伯爵 大隈重信殿

(附屬書)

外務次官 松井慶四郎殿

意見

満洲ニ在勤スル支那高官ノ我ニ対スル主義如何ハ将来満蒙ニ於ケル我力施設經營上至大ノ關係ヲ有シ候ニ付右高官ノ任命ニ關シ此際支那政府ト内約ヲ遂ケ置クハ利權實行上最も緊要ノ儀ト思料被致候ニ付右ニ閑シ左ニ愚見開陳致候間御閲覽ノ上御一考ヲ煩スヲ得ハ幸甚不過之候尤モ右ハ中村都督モ同様ノ意見ニ有之候ヘトモ都督ヨリ提出致候テハ反ツテ廉立ツ嫌有之候ニ付小官ヨリ具申致候次第御諒察被成下度此段申進候 謹首

大正四年六月二十三日

関東都督府民政長官 白 仁 武

奉天省ノ將軍及巡按使ノ任命ハ支那政府ヲシテ予メ帝国政府ト内協議ヲナサシムルノ要アリト信ス

理由

滿蒙問題ハ今次ノ日支條約ニヨリ大要解約ヲ告ケタリト雖之カ實行上ニハ幾多ノ障害ヲ生スルコト疑フ容レス而シテ其最モ大ナル關係ヲ有スルハ奉天省ニ在職スル支那高官ノ主義如何ニアルコト論ヲ待タス之カ為奉天省ノ將軍及巡按使ヲ人選スル場合ニハ一応帝国政府ノ内意ヲ聞カシムルヲ要ス

然レトモ之ヲ表面上ヨリ彼ニ強フルモ彼慮セサルコト明ナルヲ以テ此際裏面ノ慣例ヲ作ルコト必要ナリ

風説ニ依レハ張上將軍普京ヲ機トシ其ノ宿望タル辭職ノ申出ヲナスヘシト若シ此風説ニシテ果シテ信ナランニハ在京帝国公使ヲシテ左ノ意味ヲ以テ内々支那政府ニ申込ノ手段ヲ取ラシムルノ要アルヘシ

日支ノ交渉纔ニ平和的解決ヲ告ケシモ各地共ニ排日排貨

ニ熱中スル今日若シ排日的思想ヲ有スル人物ヲ以テ張上

將軍ノ後任トナスカ如キコトアラハ是レ支那政府ニ日支

条約實行上ノ誠意ナキハ勿論今後条約實行上徒ニ紛議ヲ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

七九五

六月

閣議案

満蒙經營調査委員会創設ニ関スル件

附屬書 右委員会規程案

附記 明治三十九年満洲經營調査委員会委員氏名(一)
(二)(三)

大正四年六月 日

内閣書記官

内閣書記官長(花押)

各大臣

九七一

近時滿蒙ニ關シ政府関係部内ヨリ意見ヲ提出スルモノアリ就中中村満鉄總裁ノ意見ハ多少事宜ニ適シタルモノアルヲ認ム然リ而シテ

一、果シテ満鉄ヲ中心機関トシテ經營ヲ進ムルトスルモ資金ノ調達其ノ他ノ方法如何

二、其ノ監督ノ途如何

三、満蒙ニ於テハ奉天總領事ヲシテ總括的職權ヲ執ラシメザルベカラスト思考スルモ其ノ職制其職員ノ配置ヲ如何ニ変更スヘキ力

四、満洲ニ於ケル他ノ機関ト領事館トノ關係ヲ如何ニスヘキ力

等決定ヲ要スヘキ事項頗ル繁多ナリト認ム依テ先ツ政府事務ノ方針ヲ決定スル為一調查委員会ヲ設ケラレ速ニ結果ヲ報告セシメラレ可然ト認ム

(附屬書) 満蒙經營調查委員会規程案

一、委員会ハ外務大臣ノ監督ニ属シ新ニ満蒙ニ進ムヘキ経営ノコトニ付調査ス

二、委員会ハ委員長及委員ヲ以テ組織ス

委員長ハ外務大臣ヲ以テ之ニ充ツ
委員ハ左ニ掲クル者ヲ以テ之ニ充ツ

外務次官

外務省政務局長

法制局長官

外務省通商局長

農商務次官

農商務省農務局長

農商務省鉱山局長

大蔵省参政官

大蔵省理財局長

鐵道院副總裁

大蔵省主計局長

滿鉄副總裁、理事ノ内二人

三、本委員会ニ關スル一切ノ事項ハ渾テ秘密トシ公表セス

(附記)

明治三十九年満洲經營調查委員会委員氏名(一)(二)(三)

(一) 明治三十九年二月

満洲經營調查委員長 周玉源太郎

委員

珍田捨己

(三)
明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

石本新六

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

仲小路齊

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

若槻禮次郎

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

荒井賢太郎

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

山座圓次郎

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

森田茂吉

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

仲小路廉

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

石本新六

明治三十九年十一月

満洲經營調查委員長

委員

寺内正毅

明治三十九年十一月

(二)

明治三十九年六月

満洲經營調查委員長 陸軍大將子爵周玉源太郎

委員

外務次官

明治三十九年六月

満洲經營調查委員長

委員

仲小路廉

明治三十九年六月

満洲經營調查委員長

委員

若槻禮次郎

明治三十九年六月

満洲經營調查委員長

委員

山座圓次郎

明治三十九年六月

満洲經營調查委員長

委員

寺内正毅

明治三十九年六月

日本ノ中國政策ヲ批判シタル周農商總長ノ談話報告ノ件

附屬書 農商總長周自齊談話要領

公信第二〇〇号(機密) (七月十二日接受)

在中國日置公使ヨリ
加藤外務大臣宛

農商總長周自齊ハ平素當館船津書記官ト懇意ナルカ日支交涉解決前後ニ涉リ久シク会晤ノ機ナカリシ為久振リニ閑談旁午餐ヲ共ニシタキニ付來駕アリタシトノ事ナリシ故同書

記官ハ數日前同総長ノ私邸ニ赴キタル処談話ハ各種ノ時事問題ニ關シ交換サレタルカ就中日支新条約及日支間ノ關係ニ付大要別紙ノ通内話シタル趣ニ有之候右ハ参考トナルヘキ点不尠ト認メ及報告候間御查閱相願度此段申進候也

(附屬書)

農商総長周自齊談話要領

予ハ可成議論ヲ避ケヘシ然シ予ヲシテ忌憚ナク這回ノ日支交渉ニ付批評セシムレハ日本ノ要求ハ無理ナル点甚タ多力ラント信ス日本ハ山東戦争ノ結果東洋ノ局面一変シタルヲ機会トシテ多年ノ懸案ヲ一掃スル為メ這回ノ要求ヲ提起シタリト称スルモ我等ノ目ヨリ見レハ日本ハ歐洲多事ノ時ニ乘シ又支那ノ抵抗力ナキヲ輕侮シ此ノ如キ過酷ナル要求ヲ提出シタルモノニテ如何ニモ残酷ナリトノ観念ハ一般支那人ノ間ニ瀰漫シ居ルモノノ如シ予自身ニ於テモ左様ニ感セサル能ハス仮リニ一步ヲ譲リ東洋ノ大勢我国カ右ノ如キ運命ニ逢着スルハ致方ナシトルモ要求条件中ニハ事実支那ノ主權ヲ侵害スルモノ少カラサリシ譬へハ顧問及軍器、警察合辦等ノ如キ其最モ甚シキモノナリ幸ヒニ後日ノ協商ニ譲ル事トナリシモ後日ト云へハ一ヶ月ノ後モ後日ニテ其問

題タルヤ何日何時再ヒ提起セラルルヤ分ラス支那ニ取リテハ矢張不安ノ念ニ堪ヘサル次第ナリ且ツ軍器ノ統一トカ独立トカ日本側ノ説モ一理ナキニ非ルモ日本ノ勧告ニ從ヒタリテ容易ニ統一カ実行サルルトモ申シ難ク況ンヤ独立ナトハ思ヒモ寄ラヌ事ナリ要スルニ顧問ノ如キ軍器ノ如キ双方意思ノ充分疏通円熟シタル後ニ極メテ隠密ノ間ニ或ハ実行出来ル事アランモ日支両国ノ現状ニ鑑ミ是等ヲ条約談判ノ箇条中ニ列記シテ承諾ヲ強制スヘキ性質ノモノニ非サルヘシト考ヘラル警察合辦ノ如キモ同様ナリ故ニ日本這回ノ要求中其交渉ノ方法如何ニ依リテハ案外容易ク纏マルヘキモノアリシナラン交渉解決後支那人ノ対日惡感益增長セルハ寧ロ当然ニシテ決シテ無責任ナル新聞ノ煽動ノミニ因ルニ非ス貴国人ハ動モスレハ曰ク支那人ハ世界ノ大勢ニ通セス随テ日本ノ支那ニ對スル真意ヲ曉ラス誤解ノ爲益排日ノ氣勢ヲ強メツツアリ是東洋大局ノ爲甚タ憂フヘキ事ナリト然リ日支人感情ノ疎隔ハ東洋大局ノ爲實ニ憂フヘキ一大事ナリ然レトモ支那人誤解ノ因ヲ作ルモノハ果シテ誰ノ過ナルカ今予ヲシテ忌憚ナク予カ常ニスル所ノ我国世論ノ一部分ヲ茲ニ繰返サシメヨ

第一、日本ノ朝鮮併合ハ支那人疑惧ノ根原ナリ聞ク所ニ拠レハ日本ハ朝鮮併合ノ結果今日迄何等實質的利益ナク反テ年々三千余万ノ國幣ヲ靡シツツアリ此多大ノ犠牲ヲ払フモ大局維持ノ爲ニハ已ムヲ得サル次第ナリト然レトモ我邦人中之ヲ聞テ首肯スルモノ果シテ誰人カアル我邦人ハ日本カ朝鮮ノ独立ヲ擁護スルト称シナカラ幾モナク之ヲ併呑セルノ事實ヲ目撃セリ若シ日本カ義ニ依リテ朝鮮ノ独立ヲ擁護スルノ眞意アラハ何故国王ヲ廢セシヤ統監ヲ置キ總テ實權ヲ日本ノ手ニ収メタル以上国王ノ名義ヲ有スルモ何ノ害アラン日本ハ日本ノ都合アリシナランモ支那人ノ目ヨリ見レハ朝鮮獨立ノ擁護云々ハ之ヲ併呑スルノ前提ニ過キサリシト思ヘリ何レ滿洲モ同様ノ運命ニ逢着スルナラントハ四億万ノ多數カ想像セル処ナリ果セル哉今回旅大租借期限ノ延長、滿洲開放、鉄道管理期限ノ延長等モ要求セラレタリ同時ニ東蒙迄モ包含サレタリ滿洲ハ是迄日本カ幾多ノ犠牲ヲ払ヒシ地ナレハ右ノ如キ要求アリシトテ別段驚クニ及サルモ東蒙迄モ其勢力圏内ニ引込マレテハ如何ニ神經遲鈍ナル我邦人トモ一驚ヲ喫セサルヲ得ス日本ハ今ヤ其勢力範囲ヲ滿洲ヨリ山東及

東蒙古ニ延長拡大シ北京即四百余州ノ首脳タルヘキ首善ノ地区ハ殆ント其三面ヲ日本ノ爲ニ包囲サレタル形勢トナレリ支那人士タルモノ從来ノ歴史ニ顧ミ日本ノ野心ヲ疑ハサラント欲スルモ豈ニ得ヘケンヤ日本カ支那ノ獨立ヲ擁護シ支那ノ領土ヲ保全スルナト大声疾呼サルル丈ケソレ丈ケ我邦人ヲシテ益疑懼ノ念ヲ強フセシメ不遠朝鮮ノ覆轍ヲ踏ムヤモ計リ難シナトノ杞憂ヲ懷カシムルモ亦無理ナラヌ次第ナリ

第二、去年青島戰役以来今日迄山東ニ於ケル日本軍隊ノ暴横ハ實ニ我等支那人トシテハ忍ヒ難キ程ナリシ北京ニハ山東人甚多シ故ニ山東ニ於ケル日本人ノ行動ハ極メテ詳細又ハ迅速ニ報道セラレ坊間ニ輾轉伝播サレツツアリ当地ノ新聞ニ頻々トシテ日本軍暴行ニ關スル記事ノ頗ハルルハ之レカ爲ナリ予自身亦山東人ナリ親戚故旧ノ山東ニ在ルモノ多シ隨テ山東ニ於ケル日本軍ノ暴行ニ關シテハ最モ聞ク所多シ固ヨリ中ニハ隨分誇張サレタル報道モアリ悉ク信スルニ足ラサルハ勿論ナルモ何レモ多少其根拠アルモノナリ仮リニ充分割引シテモ尚ホ我邦人ヲシテ憤慨セシムルニ足ルモノ甚多シ々記憶セサレトモ今其一

例ヲ挙グレバ一農夫カ閑ニ乘シテ火繩銃ヲ携ヘテ野兎ヲ打タントシ其散弾ノ二三カ誤リテ其附近橋梁ニ立チシ日本哨兵ノ頭辺ヲ掠メタルカ否ヤ不明ナルモ直ニ之ヲ以テ農民カ日本ノ哨兵ヲ狙撃セリトナシ該農夫ハ立ロニ射殺サレタル由先ツ常識ヲ以テ判断シテモ老耄セル一農夫カ白昼火繩銃ヲ以テ単身而カモ勇猛且ツ武装セル日本兵ヲ狙撃スル事ハ到底有リ得ヘカラサル事ナラント信セラルモ右日本兵ハ何等ノ处罚ヲモ受ケス而シテ農民ハ空シク殺サレ損トナリ居レリ是ハ其一例ニ過キス其他日本当局者カ不公平ナル措置ハ一々枚挙スルニ違アラス聞ク所ニ拠レハ日本軍隊ノ暴行ハ満洲ニ於テモ頻々トシテ發生シ居レル由之ヲ未然ニ防止スル事或ハ困難ナランモ責メテ事後ニ於テナリトモ極メテ公平ナル措置ヲ施サレ支那人ヲシテ心服納得シムル事日本ノ為得策ナラン歟ト信ス其外満鉄ニセヨ山東鉄道ニセヨ露国人ヤ独逸人ハ細些ナル事業ニハ余リ手ヲ下サス隨テ支那商人ノ利ヲ得ル余地アリシモ日本人ノ手ニ渡リシ以來殆ント有ラユル利益ヲ壊断セル傾アリ甚シキハ日支人間ニ差別的取扱ヲナスコトアリト云フ日本カ若シ支那ヲ誘導啓發シテ東洋ノ霸権

サヘ其家具迄紛失セシムルニ至リテハ我等支那人ヨリ見レハ如何ニモ不都合千万ト思フ外ナシ是等ヲ見テモ吾人ノ耳朶ニ達スル山東ニ於ケル日本人暴行ニ關スル幾多報告ハ遺憾ナカラ之ヲ信セサル能ハサル次第ナリ

第四、予ハ山東人ナルト同時ニ革命後山東都督トシテ濟南ニ在勤セシコトアル故比較的該地ノ事情ニ通シ居ル積リナリ隨テ該地ニハ由來馬賊ナルモノ皆無ナリシコトヲ熟知ス然ルニ日本軍侵入以來該地ニハ時々馬賊出没シ土民

其害ヲ受クルモノ渺カラス聞ク所ニ拠レハ是等馬賊ハ日本官憲默認ノ下ニ満洲方面ヨリ渡航セシモノニテ其背後ニハ幾多ノ日本人モ加ヘリ居レリトノ噂アリ其真偽斷定出来サレトモ我邦人一般ニハ之ヲ信シ居レリ斯クノ如ク數ヘ来レハ日本ノ支那ニ對スル態度カ常ニ侵略的野心アル如ク見受ケラルル実例甚多シ予等カ之ヲ善意的ニ解釈シテ辯護セント欲スルモ実ハ之ヲ辯解スルニ有力ナル理

由ヲ見出ス能ハサルヲ遺憾トス現ニ閑税ノ改正ニシテモ重ナル各国カ之ヲ承認シ居ルニ拘ハラス日本獨リ同意ヲ表セス又漢口駐屯隊ノ如キ各国既ニ撤退セシニ拘ハラス日本獨リ之ヲ存置セリ恰モ日本ハ事ニ支那ノ利益ニ反

打タントシ其散弾ノ二三カ誤リテ其附近橋梁ニ立チシ日本哨兵ノ頭辺ヲ掠メタルカ否ヤ不明ナルモ直ニ之ヲ以テ農民カ日本ノ哨兵ヲ狙撃セリトナシ該農夫ハ立ロニ射殺サレタル由先ツ常識ヲ以テ判断シテモ老耄セル一農夫カ白昼火繩銃ヲ以テ単身而カモ勇猛且ツ武装セル日本兵ヲ狙撃スル事ハ到底有リ得ヘカラサル事ナラント信セラルモ右日本兵ハ何等ノ处罚ヲモ受ケス而シテ農民ハ空シク殺サレ損トナリ居レリ是ハ其一例ニ過キス其他日本当局者カ不公平ナル措置ハ一々枚挙スルニ違アラス聞ク所ニ拠レハ日本軍隊ノ暴行ハ満洲ニ於テモ頻々トシテ發生シ居レル由之ヲ未然ニ防止スル事或ハ困難ナランモ責メテ事後ニ於テナリトモ極メテ公平ナル措置ヲ施サレ支那人ヲシテ心服納得シムル事日本ノ為得策ナラン歎ト信ス其外満鉄ニセヨ山東鉄道ニセヨ露国人ヤ独逸人ハ細些ナル事業ニハ余リ手ヲ下サス隨テ支那商人ノ利ヲ得ル余地アリシモ日本人ノ手ニ渡リシ以來殆ント有ラユル利益ヲ壊断セル傾アリ甚シキハ日支人間ニ差別的取扱ヲナスコトアリト云フ日本カ若シ支那ヲ誘導啓發シテ東洋ノ霸権

ヲ握ラントノ希望アラハ今少シク寛宏ナル襟度ナカルヘカラス

第三、青島ニハ革命後我国知名ノ士仮令ハ國務卿徐世昌ヲ始メトシ趙爾巽（參政院參政）楊度（同上）張人駿（前清兩江總督）莊蘊寬（都肅政史）其吳郁生、張勲、許鼎霖等支那一流ノ人物陸統邸宅ヲ構ヘ殆ント永住的ノ設備ヲ為セシモノ多カリシニ日本占領後ハ是等知名ノ人士ハ何レモ帰還スルモノナク徐世昌莊蘊寬ノ如キ何レモ職務上帰還ハ不可能ナルモ最近其家財ヲ運出シ全然該地ヲ引揚ケタル由其原因ハ全ク日本官憲（殊ニ下級軍人）ノ支那人ニ対スル態度余リ嚴酷横暴ニシテ獨治時代身分アル支那人ニ対シ有ユル便宜ヲ与ヘラレタルトハ到底比較ニナラス現ニ趙爾巽及楊度所有家屋ノ如キ戰時中獨人ノカ一時使用セシヤ否ヤ戰爭ノ際所有主避難中ノコト故之ヲ確知スル事能ハス仮リニ獨人使用シタリトスルモノハ獨人ノ所為ニシテ所有主ノ与リ知ル所ニ非ス然ルニ日本軍憲ハ所有主ノ身分ナソ何等考量ヲ加ヘス之ヲ押收シ剥

對シ支那ノ体面ヲ蹂躪スル方針ナル如ク見受ケラル是レ支那カ日本ヲ疑ハサラント欲スルモ能ハサル所以上ナリ又日支ノ親善カ絶対必要ナルニ拘ラス其實行容易ナラサル所以ナリ是ヲ以テ吾人ハ此際先ツ日本ニ於テ我國民誤解ノ種子トナリ或ハ疑惑ノ原因トナリ居ルモノヲ一掃サレン事ヲ切望シテ已マサル次第ナリ云々

七九七 七月十七日 上山農商務次官元ヨリ
松井外務次官宛

東部内蒙古探査団派遣計画ニ付通報ノ件

拝啓東部内蒙古探査団派遣ノ義ハ力メテ支那側ヲシテ軍事的探査團ナルカ如キ疑惑ヲ起サシメサルコトニ注意シ全然実業的ノモノタラシメ成ルヘク目立タサル仕組トシ別紙人員派遣ノコトニ決定右ニ對スル經費ヲ大藏省ニ請求致置候間右様御承知相成度此段申進候 敬具

大正四年七月十七日

農商務次官 上山 滿之進

外務次官 松井慶四郎殿

（別 紙）

一般調査

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ関スル件

九七八

一般調査ヲ四班ニ分ツ各班ノ人員ハ左ノ如シ

調査員 将校(案内一名) 三名
馬匹調査一名 二名

軍医 一名

通訳 六名

鉱山調査

鉱山調査ヲ三班ニ分ツ各班ノ人員ハ左ノ如シ

調査員 将校(案内) 二名

通訳 二名

但陸軍將校ニハ軍服ヲ着セシメス

七九八 七月二十二日 在奉天井深彦三郎・三谷末治郎ヨリ

日支銀行開設ニ關シ意見具申ノ件

附屬書 右意見書

附記一 日支銀行法案關係書類

二 滿蒙銀行法案關係書類

(七月二十六日接受)

拝啓 酷暑之候御左右益御清適ニ被為渡奉慶賀候陳ハ頃日
日支銀行開設之議頻ニ紙上ニ散見イタシ候處右ハ生等年來

滿蒙特殊銀行ノ開設ヲ希望シ來リタル其本旨ト全ク其性質ヲ異ニスル様ノ事ニ立至リ候テハ為将来誠ニ不堪憂慮義ニ有之聊カ左ニ愚見ヲ陳シ候間一応御垂覽之上当事諸公ニ御伝唱相仰度懇禱之至ニ御座候 勿々敬具

大正四年七月念二日 在奉天

井深彦三郎

三谷末治郎

外務省政務局長 小池張造殿

(附屬書)

足スルモノトセハ滿蒙經營ノ意味ヲ為サザルヘシ論者或ハ云ハシ銀行ノ放資ハ日支人ノ事業ヲ助ケ彼我ノ関係ヲ澎張セシムルモノナリト嗚呼是レ何等ノ言ソヤ斯ル徒輩ハ共ニ滿蒙ノ經營ヲ語ルノ資格ナキモノナリ試ミニ思ヘ滿蒙經營ノ要件タル土地ノ買収鉱山ノ經營若クハ農工殖産或ハ通商ノ事業ニ向テ低利ノ資金ヲ供給スルニ方タリ同一ノ保護ヲ支那人ニ加フルトキハ其結果ハ如何我ハ客タリ彼ハ主タリ我レ一步ヲ進メハ彼レ數歩ヲ進ムヘキ諸多ノ便宜ヲ有スル事情ノ下ニ我邦人ノ發展ヲ期シ得ラルヘキカ且ツ夫レ我邦人ノ事業ニ向テ満足ナル金融ノ便ヲ与ヘンコト既ニ容易ノ業ニアラス今仮リニ滿蒙特殊銀行ヲ創設センカ進ンテ之ヲ組織スルモノハ必スヤ政府特別ノ助力ヲ要請シ来タルヘシ而シテ政府ハ能ク此等ヲ満足セシメ尚未余裕アリテ支那人ノ事業ヲ保護シ能フヤ否若シ日支銀行ヲシテ政府ノ力ヲ仮ラスト云ハハ先ツ其營業予算ヲ示セヨ横浜正金銀行ノ支那ニ固定セル資本ノミニテモ既ニ五千万円ヲ逾ユ日支銀行ハ自家ノ資本以外ニ果シテ幾許ノ預金ヲ吸收シテ之ヲ放資シ固定セシメ得ルトナスカ夫レ或ハ遠キ将来ニ於テ基金ノ潤沢ヲ見ルコトアルヘシト雖満蒙ノ經營ハ一日ヲ緩フスル

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

七九八

九七九

能ハサルヲ奈何セン特ニ滿蒙ハ支那人ノ勢力根底既ニ深クシテ進歩ノ程度之ヲ南支那ニ比シテ讓ル所ナシ從テ我邦人ノ發展甚タ容易ナラサルモノアリ加之排日思想及ヒ利權擁護説ハ深ク彼等ノ信条トナリ邦人ノ發展ヲ嫉視シ之ヲ阻害セント欲ス即チ排貨ノ容易ニ行ハルルノ所以ニシテ斯ル障礙ハ都テノ場合ニ行ハレツツアリサレハ我邦人ノ事業ハ支那人ヨリモ高価ナル報酬ヲ支払ヒ有利ナル条件ヲ提供スルコトニ依テ成立シ得ルモノトス唯タ我ノ頼ム所ハ低利ノ資金ト文明ノ超越ニ在リ然ルニ資金ノ供給ヲ支那人ト同一ノ保護ノ下ニ置カンカ支那人ハ經濟界ヨリ我邦人ヲ驅逐シ尽サンコト洵ニ容易ナル業ナリトス夫ノ香港ニ於ケル英人ノ事業ヲ見ヨ彼等ノ智識ト彼等ノ資金ハ遙カニ支那人ニ超越セルニ拘ハラス彼等ノ事業ハ多ク支那人ノ占有スル處トナリ不動産ノ大部分ヲ占ムル家屋ハ殆ント支那人ノ所有タルニアラスヤ支那人ノ悔ルヘカラサルコト此ノ如シ今ニシテ保護ノ策宜シキヲ得邦人ヲシテ多クノ事業ヲ捉ヘシメ鞏固ナル勢力ヲ扶植スルニアラスンハ或ハ恐ル他日噬臍ノ悔ヲ遺サンコトヲ惟フニ日支銀行ハ支那人ニ對スル銀行ノ放資ヲ容易ナラシメ各種ノ借款ヲ引受クル等ノ点ニ於テ或ハ必

要ナル機関タルコトアランモ同銀行ヲシテ満蒙經營ノ重大ナル責任ヲ負ハシメントスルカ如キハ到底眞面目ニ考慮セラルヘキ問題ニアラサルコト上来说ク所ノ如シ或ハ日支銀行ノ株主ガ全然日本人ニシテ政府ノ命令ニ依テ左右シ得ラルヘキモノタラシムルモ之ヲシテ満蒙特殊ノ金融ヲ兼掌セシメントスルニ尚ホ考慮ヲ要スルモノアリ蓋シ日支銀行ハ資本國力投資國ニ対スル性質ノモノタルヲ以テ支那南北ノ事業ニ鑑ミ銀行ノタメ有利ナル事業ヲ撰択シ之ニ投資セントルハ勢ノ自然ニシテ正金銀行カ独リ満洲ニ重キヲ致ス能ハサル所以モ亦実ニ茲ニ原因ス之レ兼掌説ノ満蒙經營ヲ誤マル所以ナリトス愚見此ノ如シ謹テ賢明ナル諸公ニ訴フ（附記）

日支銀行法案關係書類

日支銀行要項

- 一 日支銀行ハ日本法人トシ本店ヲ上海ニ置クコト
- 二 資本金額ハ二千万円トシ公衆（銀行ヲ含ム）ヨリ募集スルコト
- 三 株式ハ記名式トシ日支両国人ニ限り所有スルコトヲ得ルモノトスルコト

那人タルコトヲ得セシムルコト

總裁及日本人タル副總裁ハ政府之ヲ命シ日本人タル理事ハ株主中ヨリ二倍ノ候補者ヲ選出セシメ政府之ヲ命スルコト

日支銀行法案

第一章 総則

第一条 日支銀行ハ株式会社トシ其ノ本店ヲ上海ニ置ク
第二条 日支銀行ノ存立時期ハ設立免許ノ日ヨリ滿三十年
トス但シ株主總会ノ決議ニ依リ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ延長スルコトヲ得

第三条 日支銀行ノ資本金ハ二千万円トシ之ヲ二十万株ニ

分チ一株ノ金額ヲ百円トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ資本

金額ヲ増加スルコトヲ得

第四条 日支銀行ノ株式ハ記名式トシ日本人及支那人ニ限リ所有スルコトヲ得

第二章 重役

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

四 日支銀行ノ配当金年百万ノ六ニ達セサルトキハ開業初期ヨリ十年間ヲ限リ之ニ達セシムヘキ金額ヲ補給スルコト但シ其ノ額ハ如何ナル場合ト雖払込資本金ノ百分ノ六ヲ超過セサルコト

五 日支銀行ハ各種借款ノ応募引受、不動産船舶ヲ抵当トスル貸付、其ノ他事業資金ノ融通ヲ主タル目的トシ併セテ一般銀行業務ヲモ當ムモノトスルコト

六 支那ニ於ケル一般銀行ノ例ニ依リ一覽払手形ノ発行ヲ認ムルコト

七 払込資本金額ノ十倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得セ

シムルコト但シ支那ニ於テ發行スル場合ニハ認可ヲ経テ割増金ヲ附スルコトヲ得セシムルコト

八 日支銀行ノ發行スル債券ニ対シ差当リ二千万円ヲ限リ

政府ハ其ノ元利保証ヲ為スコト但シ別途議会ノ協賛ヲ求ム
九 日支銀行ハ差当リ成ル可ク横浜正金銀行及台灣銀行ヲ代理店トシテ使用スルコト

十 日支銀行ノ重役ハ總裁一人副總裁二人理事監査役各三人以上トシ副總裁一人理事監査役ノ中三分ノ一以内ハ支那人タルコトヲ得

第五条 日支銀行ニ總裁一人副總裁二人理事監査役各三人以上ヲ置ク

副總裁一人、理事及監査役ノ中三分ノ一以内ハ支那人タルコトヲ得

第六条 総裁及副總裁中日本人ニ在リテハ二百株以上ヲ所

有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ五年トス

理事中日本人ニ在リテハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ

株主總会ニ於テ選挙シタル二倍ノ候補者中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ四年トス

副總裁及理事中支那人ニ在リテハ副總裁ハ二百株以上理

事ハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總会ニ於テ之ヲ選挙シ政府ノ認許ヲ受クルモノトシ其ノ任期ハ副總裁ハ

五年理事ハ四年トス

監査役ハ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總会ニ於テ之ヲ選挙シ其ノ任期ヲ三年トス

第七条 総裁ハ日支銀行ヲ代表シ其ノ事務ヲ總理ス副總裁ハ總裁事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ總裁欠員ノ

トキ其ノ職務ヲ行フ副總裁及理事ハ總裁ヲ補助シ定款ノ定ムル所ニ從ヒ日支

銀行ノ業務ヲ分掌ス

監査役ハ日支銀行ノ業務ヲ監査ス

第八条 総裁副総裁及理事ハ在任中何等ノ名称ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限りニ在ラス

第三章 株主総会

第九条 定時株主総会ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於テ總裁之ヲ招集ス

第十条 臨時株主総会ハ何時ニテモ總裁之ヲ招集スルコトヲ得

第十二条 監査役又ハ資本ノ五分ノ一以上ニ当ル株主ハ會議ノ目的タル事項及其ノ招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ

總裁ニ提出シテ臨時株主総会ノ招集ヲ請求スルコトヲ得

總裁前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ臨時株主総会ヲ招集スヘシ

第四章 営業

第十二条 日支銀行ハ左ノ事業ヲ営ムモノトス

一 確実ナル担保アル貸付

二 公債、社債及株式ノ応募、引受又ハ買入

先チテ自己ノ債権ノ弁済ヲ受クル權利ヲ有ス

第十七条 債券ハ券面金額ヲ十円以上トシ無記名利札附トス但シ応募者又ハ所有者ノ請求ニ依リ記名ト為スコトヲ得

第十八条 日支銀行ニ於テ債券ヲ発行セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十九条 日支銀行ハ券面金額二十円以下ノ債券ヲ発行スル場合ニハ売出ノ方法ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ売出期間ヲ定ムルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ社債申込証ヲ作ルコトヲ要セス

第一項ノ規定ニ依リ発行スル債券ニハ商号及商法第百七十三条第二号、第四号乃至第六号ニ掲ケタル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

商法第二百四条ノ三第一項ノ期間ハ債券ノ売出期間滿了ノ日ヨリ之ヲ起算シ其ノ登記スヘキ事項ハ売出期間内ニ於ケル債券ノ売上総額及商法第百七十三条第四号乃至第六号ニ掲ケタル事項トス

売出ノ方法ニ依リ債券ヲ発行シタル場合ニ於ケル社債ノ登記ノ申請書ニハ売出期間内ニ於ケル債券ノ売上総額ヲ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

第十三条 日支銀行ハ官公署ノ委託ニ依リ金銭及有価証券ノ出納保管ニ關スル事務ヲ取扱フコトヲ得

第十四条 日支銀行ハ本法ニ定メタルモノノ外他ノ営業ヲ為スコトヲ得ス但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限りニ在ラス

第五章 債券

第十五条 日支銀行ハ払込資本金額ノ十倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ貸付金及其ノ所有ニ係ル公債証券、社債券及株券現在高ヲ超過スルコトヲ得ス

債券ヲ發行スル場合ニハ商法第百九十九条ノ規定ヲ適用セス

第十六条 日支銀行債券ノ所有者ハ日支銀行ノ貸付金、其ノ所有ニ係ル公債証券、社債券及株券ニ付他ノ債権者ニ

第六章 準備金

第二十条 日支銀行ハ売出ノ方法ニ依リ債券ヲ發行セムトスルトキハ売出期間及商法第二百三条第二項第一号乃至第三号ニ掲ケタル事項ヲ公告スヘシ

第二十一条 日支銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ債券ヲ償還スル場合ニ於テ割増金ヲ附与スルコトヲ得

第二十二条 日支銀行ハ債券借換ノ為一時第十五条ノ制限ニ依ラス低利ノ債券ヲ發行スルコトヲ得

低利ノ債券ヲ發行シタルトキハ發行後三月内ニ其ノ發行券面額ニ相当スル旧債券ヲ償還スヘシ

第七章 政府ノ監督及補助

第二十三条 日支銀行ハ毎営業年度準備金トシテ資本ノ欠損ヲ補フ為利益ノ百分ノ八以上ヲ、利益配当ノ平均ヲ得セシムル為利益ノ百分ノ二以上ヲ、金銀比価ノ変動ニ備フル為利益ノ百分ノ五以上ヲ積立ツヘシ

第二十四条 政府ハ日支銀行ノ業務ヲ監督ス

第二十五条 日支銀行ハ其ノ定款ヲ変更セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十六条 日支銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケルニ非サレハ株主ニ配当金ノ分配ヲ為スコトヲ得ス

第二十七条 主務大臣ハ日支銀行ニ於テ法律命令又ハ定款ニ背戾シ若ハ公益ヲ害スヘキ行為アリト認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ政府ハ總裁、日本人タル副總裁、理事ヲ解職シ又ハ監査役、支那人タル副總裁、理事ノ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第二十八条 日支銀行ハ主務大臣ノ命令ニ従ヒ其ノ営業ニ關スル報告書ヲ差出スヘシ

第二十九条 政府ハ日支銀行監理官ヲ置キ日支銀行ノ業務ヲ監視セシム

第三十条 日支銀行監理官ハ何時ニテモ日支銀行ノ金庫、券書庫、帳簿、諸般ノ文書及財産ヲ検査スルコトヲ得

日支銀行監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ日支銀行ニ命シテ営業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトヲ得

日支銀行監理官ハ株主總会ノ他諸般ノ會議ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

日支銀行監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ日支銀行ニ命シテ営業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトヲ得

後株主ヲ募集ス

第三十六条 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込証ヲ政府ニ提出シ日支銀行設立ノ免許ヲ申請スヘシ

前項ノ免許ヲ受ケタルトキハ設立委員ハ遅滞ナク各株式ニ付第一回ノ払込ヲ為サシムルコトヲ要ス

第三十七条 創立總会終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ日支銀行總裁ニ引渡スヘシ

第三十八条 設立初度ノ日本人タル理事及監査役ハ株主中ヨリ政府之ヲ命ス

日支銀行法案理由書

日支両國間ノ經濟的關係ヲ親密ナラシメ支那ニ於ケル我力経済上ノ發展ヲ期スル為日支銀行ヲ設立スルノ必要アリ是レ本案ヲ提出スル所以ナリ

(附記二)

滿蒙銀行法案関係書類

滿蒙銀行要領

一 満蒙銀行ハ日本法人トシ本店ヲ奉天ニ置クコト
二 資本金額ハ一千円トシ公衆（銀行ヲ含ム）ヨリ募集スルコト

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

第三十一条 日支銀行ノ配当金年百分ノ六ニ達セサルトキハ政府ハ開業初期ヨリ十年間ヲ限リ之ニ達セシムヘキ金額ヲ補給スヘシ其ノ額ハ如何ナル場合ト雖払込資本金ノ百分ノ六ヲ超過スルコトヲ得ス

第八章 罰則

第三十二条 日支銀行ニ於テ左ノ事犯アリタルトキハ總裁、副總裁及理事ヲ百円以上千円以下ノ過料ニ処ス但シ事犯ニ闇セサル者ハ此ノ限ニ在ラス

一 本法ニ於テ認可ヲ受クヘキ場合ニ認可ヲ受ケサルトキ

二 第十五条、第二十条、第二十二条第二項、第二十三条ノ規定ニ違反シタルトキ

第三十三条 日支銀行ノ總裁、副總裁又ハ理事第八条ノ規定ニ違反シタルトキハ二十円以上三百円以下ノ過料ニ処ス

附 則

第三十四条 政府ハ設立委員ヲ命シ日支銀行ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第三十五条 設立委員ハ定款ヲ作リ政府ノ認可ヲ受ケタルトキ

但シ此ノ貸付金ハ返済ニ隨ヒ漸次国庫ニ回収スルコト

十一 満蒙銀行ノ重役ハ總裁副總裁各一人理事監査役各三人以上トシ總裁副總裁ハ政府之ヲ命シ理事ハ株主中ヨリ

二倍ノ候補者ヲ選出セシメ政府之ヲ命スルコト

監査役ハ株主中ヨリ之ヲ選舉セシムルコト

満蒙銀行法案

第一章 総則

第一条 満蒙銀行ハ株式会社トシ其ノ本店ヲ奉天ニ置ク

第二条 満蒙銀行ノ存立時期ハ設立免許ノ日ヨリ滿五十年トス但シ株主總会ノ決議ニ依リ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ延長スルコトヲ得

第三条 満蒙銀行ノ資本金ハ一千万円トシテ之ヲ二十万株ニ分チ一株ノ金額ヲ五十円トス但シ政府ノ認可ヲ受ケテ資本金額ヲ増加スルコトヲ得

第四条 満蒙銀行ノ株式ハ記名式トシ日本人及支那人ニ限リ所有スルコトヲ得

第二章 重役

第五条 満蒙銀行ニ總裁副總裁各一人理事監査役各三人以

第九条 定時株主總会ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於

第三章 株主總会

テ總裁之ヲ招集ス

第十一条 臨時株主總会ハ何時ニテモ總裁之ヲ招集スルコトヲ得

第十二条 監査役又ハ資本ノ五分ノ一以上ニ当ル株主ハ會議ノ目的タル事項及其ノ招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ

総裁ニ提出シテ臨時株主總会ノ招集ヲ請求スルコトヲ得
総裁前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ臨時株主總会ヲ招集スヘシ

第四章 嘉業

第十二条 満蒙銀行ハ左ノ事業ヲ営ムモノトス

一年賦又ハ定期償還ノ方法ニ依リ不動産上ノ権利又ハ商租權ヲ担保トスル貸付

二 鉱山、鐵道其ノ他確実ナル担保アル貸付

三 公債証券、社債券、株券其ノ他ノ有価証券又ハ貨物ヲ質トスル貸付

四 諸預り金及保護預リ

五 証券ノ割引及代金取立

六 為替及荷替

七 信託ノ業務

第十七条 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

第六条 総裁、副總裁ハ二百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ五年トス

理事ハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總会ニ於テ選挙シタル二倍ノ候補者中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ四年トス

監査役ハ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總会ニ於テ之ヲ選挙シ其ノ任期ヲ三年トス

第七条 総裁ハ満蒙銀行ヲ代表シ其ノ事務ヲ總理ス

副總裁ハ總裁事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ

副總裁及理事ハ總裁ヲ補助シ定款ノ定ムル所ニ從ヒ満蒙銀行ノ業務ヲ分掌ス

監査役ハ満蒙銀行ノ業務ヲ監査ス

第八条 総裁、副總裁及理事ハ在任中何等ノ名称ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五章 債券

八 地金銀ノ売買及貨幣ノ交換

九 他銀行ノ業務代理

右ノ外営業上余裕金アルトキハ公債、社債及株式ノ応募、引受又ハ買入ヲ為スルコトヲ得

第十三条 満蒙銀行ハ官公署ノ委託ニ依リ金錢及有価証券ノ出納保管ニ關スル事務ヲ取扱フコトヲ得

第十四条 満蒙銀行ハ本法ニ定メタルモノノ外他ノ営業ヲ為スルコトヲ得ス但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第六条 満蒙銀行債券ノ所有者ハ満蒙銀行ノ貸付金ニ付

セス
他ノ債権者ニ先チテ自己ノ債権ノ弁済ヲ受クル権利ヲ有

行スルコトヲ得但シ其ノ貸付金現在高ヲ超過スルコトヲ得ス

債券ヲ發行スル場合ニハ商法第百九十九条ノ規定ヲ適用セス

第十六条 満蒙銀行債券ノ所有者ハ満蒙銀行ノ貸付金ニ付他ノ債権者ニ先チテ自己ノ債権ノ弁済ヲ受クル権利ヲ有

ス但シ応募者又ハ所有者ノ請求ニ依リ記名ト為スコトヲ得
務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十八条 满蒙銀行ニ於テ債券ヲ發行セムトスルトキハ主
務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十九条 满蒙銀行ハ券面金額二十円以下ノ債券ヲ發行ス
ル場合ニハ売出ノ方法ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ
売出期間ヲ定ムルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ社債申込証ヲ作ルコトヲ要セス

第一項ノ規定三依リ發行スル債券ニハ商号及商法第百七
十三号第二号、第四号乃至第六号ニ掲ケタル事項ヲ記載
スルコトヲ要ス

商法第二百四条ノ三第一項ノ期間ハ債券ノ売出期間滿了
ノ日ヨリ之ヲ起算シ其ノ登記スヘキ事項ハ売出期間内ニ
於ケル債券ノ売上總額及商法第百七十三条第四号乃至第
六号ニ掲ケタル事項トス

売出ノ方法ニ依リ債券ヲ發行シタル場合ニ於ケル社債ノ
登記ノ申請書ニハ売出期間内ニ於ケル債券ノ売上總額ヲ
証スル書面ヲ添附スルコトヲ要ス

第二十条 满蒙銀行ハ売出ノ方法ニ依リ債券ヲ發行セムト
第二十一条 满蒙銀行ニ於テ債券ヲ發行セムトスルトキハ
主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十二条 满蒙銀行ハ債券借換ノ為一時第十五条ノ制限
ニ依ラス低利ノ債券ヲ發行スルコトヲ得

第二十三条 满蒙銀行ハ每營業年度準備金トシテ資本ノ缺
損ヲ補フ為利益ノ百分ノ八以上ヲ、利益配当ノ平均ヲ得
セシムル為利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第六章 準備金

第二十四条 政府ハ满蒙銀行ノ業務ヲ監督ス

第二十五条 满蒙銀行ハ其ノ定款ヲ変更セムトスルトキハ
主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十六条 满蒙銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレ
ハ株主ニ配当金ノ分配ヲ為スコトヲ得ス

第二十七条 满蒙銀行ハ年賦償還貸付金利子ニ付每營業年

度ノ初二於テ主務大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ最高歩合ヲ定ム
ヘシ

其ノ當業年度内ニ於テ之ヲ変更セムトスルトキハ亦同シ

第二十八条 主務大臣ハ满蒙銀行ニ於テ法律命令又ハ定款
ニ背戾シ若ハ公益ヲ害スヘキ行為アリト認ムルトキハ之
ヲ制止スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ政府ハ總裁、副總裁、理事ヲ解職シ
又ハ監査役ノ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第二十九条 满蒙銀行ハ主務大臣ノ命令ニ従ヒ其ノ當業ニ
關スル報告書ヲ差出スヘシ

第三十条 政府ハ满蒙銀行監理官ヲ置キ满蒙銀行ノ業務ヲ
監視セシム

第三十一条 满蒙銀行監理官ハ何時ニテモ满蒙銀行ノ金
庫、券書庫、帳簿、諸般ノ文書及財産ヲ検査スルコトヲ
得

满蒙銀行監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ满蒙銀
行ニ命シテ當業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコト
ヲ得

满蒙銀行監理官ハ株主總会ノ他諸般ノ會議ニ出席シ意
得

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第三十二条 满蒙銀行ノ配当金年百分ノ六ニ達セサルトキ
ハ政府ハ開業初期ヨリ十年間ヲ限り之ニ達セシムヘキ金
額ヲ補給スヘシ其ノ額ハ如何ナル場合ト雖拵込資本金ノ
百分ノ六ヲ超過スルコトヲ得ス

第八章 罰則

第三十三条 满蒙銀行ニ於テ左ノ事犯アリタルトキハ總
裁、副總裁及理事ヲ百円以上千円以下ノ過料ニ処ス但シ
事犯ニ闕セサル者ハ此ノ限ニ在ラス

一本法ニ依リ認可ヲ受クヘキ場合ニ認可ヲ受ケサルト

二 第十五条、第二十条、第二十二条第二項、第二十三
一条ノ規定ニ違反シタルトキ

第三十四条 满蒙銀行ノ總裁、副總裁又ハ理事第八条ノ規
定ニ違反シタルトキハ二十円以上三百円以下ノ過料ニ処
ス

附 则

第三十五条 政府ハ設立委員ヲ命シ满蒙銀行設立ニ関スル
一切ノ事務ヲ處理セシム

第三十六条 設立委員ハ定款ヲ作り政府ノ認可ヲ受ケタル
後株主ヲ募集ス

第三十七条 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式
申込証ヲ政府ニ提出シ滿蒙銀行設立ノ免許ヲ申請スヘシ
前項ノ免許ヲ受ケタルトキハ設立委員ハ遲滞ナク各株式
ニ付第一回ノ払込ヲ為シムルコトヲ要ス

第三十八条 創立總会終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事
務ヲ滿蒙銀行總裁ニ引渡スヘシ

第三十九条 設立初度ノ理事及監査役ハ株主中ヨリ政府之
ヲ命ズ

滿蒙銀行法案理由書

滿洲及蒙古地方ニ於ケル事業資金ノ融通ヲ円滑ナラシムル
為満蒙銀行ヲ設立スルノ必要アリ是レ本案ヲ提出スル所以
ナリ

滿蒙銀行法案及滿蒙銀行法案ノ關係書類ニ關シ横田領事

ノ記シ置キタル「メモ」左ノ通

「大正四年十二月二十六七日ノ頃大藏省森銀行課長

來省日支銀行法案及滿蒙銀行法案並之カ説明書及参考
書類ヲ一綴ト為シタルモノヲ小池政務局長ニ手交

本綴込ハ右両銀行法案カ既ニ議會ニ提出セラレタル
後當方ノ参考迄トシテ大藏省ヨリ送付シ來レルモノ
ニシテ曩ニ森課長力政務局長ニ手交シタルモノノ如
ク關係書類カ完全ニ揃ヒ居ラス 橫田領事(印)」

七九九 七月二十九日

加藤外務大臣(ヨリ)
在中国日置公使宛(電報)

南滿洲ニ於ケル日本警察權ハ南滿東蒙條約二

依リ變更セラレザル旨回訓ノ件

政機密送第一二九号

本月五日附機密第二〇二号貴信ヲ以テ遼源縣及朝陽鎮ニ於
ケル我警察官竝出張所ニ關シ陸外交總長ヨリ右ハ向例ニ違

背シ且南滿東蒙條約ノ規定ニ抵触スルモノト認メラルニ
付速ニ撤退アリ度旨照会致來リ候趣ヲ以テ是レカ回答振ニ
付御請訓ノ次第閏悉致候尚又本月十日附在奉天落合總領事
來信機密公第一九一号ニ依レハ曩ニ奉天城内ニ新設セル我
警察官派出所ニ關シ同地交渉員ハ再応之力撤退方ヲ要求シ
陸外交總長同様日支新條約ヲ援引シ南滿東蒙條約第五条ニ
ハ日本國臣民ハ支那國警察法令ニ服スヘシトアルカ故ニ奉
天省城内ニ雜居スル本邦人ハ今後總テ支那警察法令ニ服從
スヘキモノニシテ租借地及鉄道用地以外ノ滿洲内地ニ於ケ
ル我警察官出張所ハ本條約實施以前ニ悉ク撤退スヘキモノ
ナリト称シ恰モ從來帝国居留民ニ對シテ行使來レル我警察
權ハ新條約施行ト共ニ當然消滅スルモノナルカノ如ク申越
シタル趣ニ有之候

然ル處從來帝国カ支那各地ノ商埠地内ニ於テハ勿論商埠地
以外ト雖必要ト認ムル地方ニ於テハ我警察官ヲ派遣シ出張
所又ハ派出所ヲ設ケ帝国臣民ノ保護取締ノ任ニ当ラシムル
所以ハ本來帝国カ支那ニ於テ領事裁判權ヲ有シ而シテ右裁
判權ハ屬人的性質ノモノタルニ依リ之ニ伴フ警察權ノ作用
カ自ラ商埠地以外ニ及フコトアルヘキト地方ニ於テハ支那
後株主ヲ募集ス

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ對滿施策ニ關スル件

七九九

九九一

シ右ハ關議ヲ經タル上當期議會ニ提出致度キニ付至
急外務大臣及外務次官ノ同意ヲ得度キ旨申陳ヘタリ
因テ詮議ノ末日支銀行法案ニ付テハ「日仏銀行設立
ノ目的ト衝突スル所ナキカ」又滿蒙銀行ニ付テハ
「適當ノ名稱ヲ詮考シテハ如何」トノ意味ノ附箋ヲ
ナシ大臣次官閱了トシテ大正五年一月(多分下旬)
ニ至リ森銀行課長ニ來省ヲ求メ小池局長ヨリ之ヲ返
還シタリ

警察制度ノ現状極メテ不完全ニシテ到底安ンシテ其ノ警察
官ニ信頼スルヲ得サルカ為本邦人ノ往来頻繁ナル地方ニ於
テハ特ニ我領事館警察官ヲ分駐セシムルノ必要ヲ認メタル
ニ基クモノニシテ右ハ今後ト雖支那ノ司法及警察制度カ完
全ニ改良セラレ我領事裁判權力撤廢セラルノ日アルニ至
ラサル限り依然トシテ繼續セラルヘキモノニテ今更ラ支那
側ノ申出ニ応シ此際我既設ノ出張所ヲ撤廢スルカ如キコト
ハ斷シテ之ヲ行フ能ハサル義ニ有之候陸外交總長ハ我警
察官出張所制度ヲ以テ向例ニ違背スト為スモ右ハ前陳ノ理
由ニ基キ既ニ多年ノ慣行トナレル事實ニシテ現ニ鐵嶺領事
館管下ノミニ就テ謂フモ遼源縣、朝陽鎮以外ニモ數箇ノ出
張所アリ而シテ支那官憲ニ於テモ從來必要已ムヲ得サルノ
便法トシテ之ヲ默認シ來レル次第ニ有之又支那側ニ於テハ
新條約ヲ援引シ本制度ヲ以テニ抵触スルモノナシ奉天
交渉員ノ如キハ南滿東蒙條約第五条ノ規定ニ依リ恰モ南滿
ニ於ケル從來ノ我警察權行使關係ニ変更ヲ來スヘキモノナ
ルカノ如ク申越シ居レルカ右新條約第五条第二項ノ規定ニ
依リ土地ニ關スル民事訴訟ノ一事ヲ除キテハ帝国ハ依然ト
シテ南滿洲ニ於テ旧來ノ我領事裁判管轄權ヲ有スル次第ニ

シテ從テ之等地方ニ在留スル帝国臣民ノ保護取締ハ引続キ
帝国官憲ニ於テ行ハサルヘカラス我犯罪者ヲ逮捕審判処罰

スルノ手続執行振等ニ至リテモ何等從来ノ状態ヲ変更シタ

ルモノ無之且同条約第五条第一項中ニハ日本国民力支那

国警察法令ニ服スヘキ旨ヲ規定セルモ右ハ交換公文ノ趣旨

ニ基キ支那國官憲ハ帝国領事官ト協議ノ上始メテ之ヲ施行

スヘキモノニシテ此ノ点ニ付テモ支那國官憲ニ絶対ノ自由

アル義ニハ無之候上記ノ次第ナルニ付新条約実施ノ結果ト

シテ特ニ南滿洲ニ於ケル我警察官配置ノ状態ヲ縮少セサル

ヘカラサルカ如キ理由ハ毫モ無之奉天交渉員申出ノ如キハ

甚タシキ謬見タルノミナラス陸總長ノ所謂南滿東蒙條約ノ

規定ニ抵触云々モ何等根拠ナキ次第二有之就テハ貴官ハ右

ノ次第ヲ支那当局ニ申入レラレ奉天及鉄嶺領事館管下ニ於

ケル我警察官派出所撤退ノ儀ハ到底帝国政府ノ承諾スル能

ハサル所ナル旨ヲ回答セラルト共ニ南滿洲及東部内蒙古

ニ閔スル新条約ノ解釈ニ付支那側ニ於テ誤解ナキ様併セテ

注意ヲ促シ置カレ地方官憲ヘモ夫レ夫レ示達スル様申述ヘ

ラレ度候

右及回訓候也

日中交渉ニ関スル公文書英議会ニ公表方ニ閔
スル件

政機密公第四四号

(九月六日接受)

六月九日附政合送第一一二号ヲ以テ御送付ノ日支交渉ニ閔
スル帝国政府公表ノ公文書英訳共各二通七月十二日接到致

候處本件ニ閔シテハ最初ヨリノ行懸リモ有之候事故英國政

府ニ對シテハ自然閣下ヨリ在本邦英國大使ヲ經テ本公文書

御交付ノ義トハ推察致候得共若シ未夕然ラサル場合ニハ本

使ヨリ御訓令トシテ右取計可然哉為念七月十三日往電第三

六〇号ヲ以テ及経伺置候越テ同十六日グレー氏ニ面会ノ際

同大臣ヨリ右英訳公文書ハ未タ手許ニ接到セサル趣ニテ若

シ本使手許ニ余分ノ「コピイ」有之候得者同大臣ニ於テ一

部貰受度旨希望ノ次第有之候ニ付早速本使ヨリ右及送付候

然ルニ二十一日ニ至リ右公文書受領確認ト同時ニ本文書ハ

已ニ日本政府ニ於テ公表セラレタルモノナルニ付テハ英國

外務省ニ於テモ之ヲ議会ニ提示スルコト致度旨申出有之

候先是已ニ御承知ノ通日支交渉問題ニ閔シテハ屢々英國議

会ニ於テ政府ハ質問ヲ受クル所トナリ關係書類ノ提示ヲ迫
リタル議員モ不尠而モ政府當局者ニ於テハ帝国政府ヨリ得
タル通報ハ之ヲ公表スルヲ得ス兩者間ニ介立シテ頗ル苦シ
キ立場ニアリタル次第ナルニ付テハ今回帝国政府ニ於テ右
様ノ文書ヲ公表シタルニ付テハ當国政府トシテモ之ヲ議院
ニ提出シテ本件ノ真相ヲ周知セシメントスルハ同政府當局
ノ立場トシテハ無理カラサル義ト被存候ヘ共帝国政府ニ於
テ或ハ右ニ閔シ何等カノ御考ヘモ有之ヤモ難計ト存候ニ付
右外務大臣來意ノ趣不取敢往電第三六六号ヲ以テ及申報タ
ル次第ニ有之候處該公文書ハ非公式ノ訳文ニシテ正文ヲ日
本文トシ英訳文ハ單ニ Courtesy トシテ英國政府ニ交付シ
タルモノニシテ英國議會ニ提出セラルガ如キコトハ帝国
政府ノ期待セサリシ所ナルトコロ從來英國政府ニ於テ英國
ノ利害ト直接關係ナキ他國間ノ公文書ヲ特ニ独立ノ一件ト
シテ議會ニ公表シタル例アリヤ否ヤ取調回答スヘキ旨貴電
第一九〇号御來示ノ次第有之候ニ付七月二十六日別用ニ託
シ「ラングレー」次官補ニ面会前顧御來示ノ次第ヲ程克ク
談話ノ上夫トナク貴電末段ノ次第ヲモ質問シタル處同氏ハ
該公文書ヲ議會ニ提示スルコトハ日本政府ニ於テ期待セラ

ニ移付シ希望者ノ閲覧ニ供スルカ夫レトモ我方ニテ英訳ヲ作製之ヲ右図書館ニ備フルカノ外ナカルヘシト笑談ノ裡ニ打語リ候

御承知之通日支交渉結了後ノ今日尚当国議会ニ於テ膠州湾等ニ關シ政府ニ質問ヲ試ムルモノ數次有之有様ニテ議会ノ注意ハ未タ全ク本問題ヲ脱却シ居ラサルヤニモ被感候ニ付英國政府カ如何トカシテ本件顛末ヲ議院ニ知示シ以テ政府ノ立場ヲモ明ニセシコトヲ希望シ居ルコトナルヘク前記グレー氏ノ談話ノ如キモ既チ本件ニ対スル政府当局ノ意衷ヲ反映セルモノト被認候ニ付御参考マテ本件経過茲ニ報告申進候 敬具

八〇一 八月十八日 朝鮮銀行ヨリ
外務省宛

滿洲ニ於テ小額銀行券發行ニ關スル件

朝鮮銀行

滿洲ニ於テ小額銀行券ヲ發行スルノ議

滿洲ニ於ケル我經濟的勢力ノ發展ト共ニ我金融機關ノ發行ニ係ル金券ハ租借地ハ勿論其以外ノ各地ニモ自然流通シ今ヤ我カ金券ハ彼地ニ於テ事實上ノ通貨タラントスルノ傾向

場其他幾多油房等數百千ノ労働者ヲ使用セル企業數カラス此等労働者ニ對スル賃銀ノ支払用トシテ多額ノ補助貨ヲ必要トスルハ論ヲ俟タサル所也現ニ本溪湖ノ如キハ補助貨欠乏ノ為メ屢當行奉天出張所ニ對シ其代用トシテ一円銀行券ノ供給ヲ要望シ來リ既ニ數万円ノ送付ヲナシタリ而シテ将来滿洲ニ於テハ此種ノ企業ハ益々發展スヘク而シテ其發展ニ伴ヒ益補助貨ノ必要ヲ增加スルハ亦疑ヲ容レサル所ナリ而モ一方ニ於テ我補助貨ノ散布ヲ不得策ナリトセハ茲ニ其陥欠ヲ補填スルノ方策ヲ案セサルヘカラス其唯一ノ方策ハ即チ小額銀行券換言セハ拾錢式拾錢五拾錢等一円以下ノ券面ヲ有スル銀行券ヲ發行スルニアリ蓋シ未開地ニ於テ小額銀行券カ補助貨ノ欠乏ヲ補フ上ニ於テ重要ナル効果ヲ生スルコトハ學者ノ論定セル所ナルノミナラス旧韓國時代ニ於テ當行ノ前清タル第一銀行ニ於テ發行シタル小額券ノ成績ニ於テ既ニ実驗セル所也今此實驗ヲ移シ滿洲ニ於テ再ヒ之ヲ実行センカ其良好ナル効果ヲ生スヘキハ深ク信シテ疑ハサル所ナリ且又滿洲刻下ノ狀況ニ於テ金券小額券發行ノ如何ニ必要ナルカハ時局前哈爾賓商業會議所カ本国政府ニ建議シ露貨二十哥ヲ最低位トスル小額券ヲ發行シ其流布ニヨ

ニ移付シ希望者ノ閲覧ニ供スルカ夫レトモ我方ニテ英訳ヲ作製之ヲ右図書館ニ備フルカノ外ナカルヘシト笑談ノ裡ニ打語リ候

ヲ示スニ至レリ是レ蓋シ我國民カ滿洲ニ於ケル支那幣制ノ紊乱及ヒ銀本位ニ基ク価格変動ノ弊茶ニ耐ユル能ハス隱約ノ裡ニ我カ金本位制ヲ移植セントシツアル結果ニ外ナラス是レ甚タ悦ベキ現象ナリト云ハサル可カラサル也然トモ我幣制ノ移植上茲ニ一大困難ノ横ハレルモノアリ何ソヤニスルコトノ困難ナルコト即チ是也蓋シ奉天、長春ヲ始メ中部及北部滿洲ニ於テ貨幣ノ本位トモ見做スヘキモノハ小洋錢ナリ而シテ其種類夥多ナルノミナラス其流通額ノ如キ亦頗ル巨額ナリ從テ今此小洋錢ト殆ト同一ノ外觀容量ヲ有スル帝國補助貨ヲ運移シ来リ是レフ小洋錢ノ流通区域ニ散布センカ理論上ニ於テハ小洋錢ト独立ノ価格ヲ有スル全ク別種ノ貨幣タルヲ以テ何等ノ故障ナキカ如キモ實際上ニ於テハ貨幣ノ授受ヲシテ益々錯雜紛糾ナラシムルノ恐アリ從ツテ其散布ハ大局ノ上ニ於テ大ニ考慮ヲ要スヘキ問題ナリト信ス果シテ然リトセハ滿洲ニ對スル我幣制ノ移植モ補助貨欠乏ノ為メ跛行的トナリ其功ヲ一簣ニ欠クノ憾ナシトセサル也今一般ノ小取引ニ要スル補助貨ノ必要ハ暫ク措テ論セサルモ滿洲ニ於テハ撫順本溪湖ノ鈍山ヲ始メ滿鉄ノ各工

又ハ其結果ノ如何ニヨリテハ何時ニテモ其發行ヲ停止スルハ少シモ辞スル所ニアラサル也希クハ當行ヲシテ試ミニ其成績如何ヲ実驗スルノ衝ニ當ラシメ以テ帝国ノ対満貨幣政策解決ノ一端ニ供セラレンコトヲ切望ニ堪ヘサル所ナリ

参考ノ為メ第一銀行時代ニ於テ發行シタル小額銀行券ノ統計表ヲ添付ス

小額銀行券年末現在發行高

年次	五拾錢	貳拾錢	拾錢	計
明治三十七年末	七、六九〇〇	四、一八二〇	二六、五三五〇	一四、一八二〇
三十八年末	四三、〇〇五〇	一八、五六三〇	三〇、五九六〇	八九、一〇〇〇
三十九年末	二七、二五〇〇	一四、五〇〇〇	一六、三五〇〇	五二、一〇〇〇
四十一年末	一七、五〇〇〇	一四、六〇〇〇	一三、五〇〇〇	四四、六〇〇〇
四十二年末	四、三〇〇〇	四、一〇〇〇	六、四〇〇〇	一四、八〇〇〇
四十三年末	三、九〇〇〇	三、九〇〇〇	五、七〇〇〇	一三、六〇〇〇
四十四年末	二、七五〇〇	三、〇〇〇〇	五、一〇〇〇	一〇、八五〇〇
大正元年末	二、六九〇〇	三、〇〇〇〇	五、一〇〇〇	一〇、八九〇〇
二年未	二、六九〇〇	三、〇〇〇〇	五、一〇〇〇	一〇、八九〇〇

(欄外註記)

「大正四年八月十八日本村理事持參」

八〇二 八月二十三日 在中國日置公使宛
大限兼任外務大臣ヨリ

キハ官憲ノ命令ヲ以テ日本人カ質權抵当權等ニ依リ土地ニ
關スル權利ヲ取得スル事ヲ禁止スルモノニシテ如斯ハ帝国
ニ對シ新條約ニ依リ土地商租ノ自由ヲ明約シタル趣旨ト相
容レサルモノニ有之不都合ノ甚シキモノト可申右ハ或ハ中
央政府ノ關知セサル所カトモ思考致サレ候ヘ共在滿洲支那
官憲カ斯ル態度ヲ取ルニ於テハ愈々新條約實施ノ曉ニ至リ
又々如何ナル紛議ヲ生スルヤモ難計ク惹キテ兩國ノ親和ヲ
阻害スルニ至ル事有之ヘクト思考致候就テハ貴官ハ支那當
局ニ對シ前記ノ事実ヲ指摘セラレ滿洲各地支那官憲ニ於テ
新條約ノ効果及之力実施方ニ付誤解ナキ様精々督励有之度
旨嚴重申入ラレ其結果電報相成度此段及訓令候也

大隈兼外交大臣ヨリ
在中國日置公使宛

奉天官憲ニ於テ滿蒙政策議定ニ關スル諜報報

告ノ件

附屬書 右朝鮮總督府諜報

公信政機密合送第一一〇号

本件ニ關シ今般朝鮮總督府ヨリ別紙写ノ通リノ通報接受致
シ候ニ付果シテ事實ナルヤ疑ハシキ点モ有之候得共為御參

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ對満施策ニ關スル件

中国地方官憲ノ新條約実施ニ對スル妨害的措置ニ關シ警告方訓令ノ件

公信政機密合送第一六一號

滿洲各地ニ於ケル支那官憲ハ今回ノ日支新條約ニ依リ帝國臣民カ享有スルニ至レル各種權利ノ實行ヲ不能ナラシムル

ノ目的ヲ以テ自國人民ニ對シ内々種々不当ノ干渉ヲ試ミ居ル趣ニテ先般南滿洲鐵道會社公主嶺經理係ノ發見セル奉天

財政府發給懷德縣下付ノ地券面ニハ「如抵押或典売与外國人作無効」トノ押印ヲ附シ居リ(落合總領事報告七月二十一日附公第一六四号写及山内領事報告八月十日附發第九二号写参照)又或ル地方ノ支那官憲ハ人民ニ對シ本邦人ニ土地家屋ヲ貸与スヘカラサル旨ヲ訓示シ適々之等貸借契約ノ進行スルアラハ巡警等ヲ派遣シ妨害運動ヲ試ミ(竹内分館主任落合總領事宛報告七月十九日附機密第一〇号写参照)其ノ他奉天張巡按使ノ如キモ亦省内各県知事ニ對シ自國人民ヲシテ鉱山又ハ土地等ニ關シ濫リニ外国人ト契約ヲ取結ハシメサル様嚴重訓示シタル趣(落合總領事來電第一三〇号参照)ニ有之候處右ハ何レモ新條約取極ノ精神ニ違背セルハ申ス迄モ無ク殊ニ奉天財政府發給ノ地券面記載文字ノ如

八〇三

九九七

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ関スル件 八〇三

九九八

二、交渉事項ニ関スル件

日支人民一地ニ雜居セハ交渉事務ノ繁多ハ勢免レサル處之ヲ省城ノ交渉委員ニ委スルトキハ徒ニ応接ニ暇アラサルノミナラス事機ヲ失シ時間ヲ空費シ阻碍尠カラサレハ

適當ノ地点ニ交渉機関ヲ設立シ交渉委員ヲ派シテ各所ノ

交渉事務ヲ專司セシメ尚重要事件ハ省城交渉委員ニ於テ處理スヘシ

三、財政ニ関スル件

将来交渉、司法、軍、警、実業、各機關ノ増設ヲ要シ所要ノ経費頗ル巨額ナレハ中央政府ニ對シテ若干ノ支出ヲ請ヒ更ニ若干ヲ本省ヨリ調達シ以テ政務ヲ處理ス並中蒙銀行ヲ設立シテ滿蒙ノ金融權ヲ鞏固ニシ以テ市面ノ活動ヲ図ル

四、軍政ニ関スル件

外人居居住地点ハ中國保護ノ責任アリ然ルニ東省胡匪熾ニ搶掠屢發生シ且日支軍隊同一地ニ居レハ亦誤会ニ因リ事端ノ發生ヲ免レス故ニ陸軍ヲ增加シテ地方ノ治安ヲ保チ且雙方ニテ規定ヲ作り各恪守シテ侵ササラシム

五、商埠ニ關スル件

六、警察ニ關スル件

日支人民雜居ノ地彼是互市ノ区盜賊ノ防範秩序ノ維持皆頗ル繁難ナルヲ以テ省中ニ專局ヲ設置シ各處ニ分局（協議ノ上開クヘキ商埠内ニ）ヲ設立シテ專司シ籌画周詳ヲ得セシム

七、司法ニ關スル件

日本人民ハ條約ノ規定ニ依リ東省各所ニ於テ一切ノ事業ヲ經營スルコトヲ得ルヲ以テ直接間接ニ發生スル訴訟事件從テ多ク之カ弁理亦容易ニアラサレハ相當ノ地点ニ多くの司法機關ヲ設ケ日本文言ニ精通シ學識富有ノ者ヲ選派シ訴訟事務ヲ專理セシム

八、教育ニ關スル件

滿蒙人民風氣開ヶス智識幼稚ニシテ毫モ國家思想ナキヲ以テ多クノ半日学校ヲ設立シ中下民ニ普通智識ノ普及ヲ図リ高等以上ノ學校ニハ日本文言ノ教課ヲ加ヘ以テ時需ニ応ス

十二、鉱產ニ關スル件

東省鉱產ノ富全國ニ冠タレハ其ノ興弁成功シタルモノニ就キ方法ヲ設ケ拡張シテ利源ヲ増生セントス

以上

本書發送先

總督 政務總監（總務局長）

陸軍大臣 參謀總長 軍司令官 師團長 憲兵司令官
内閣書記官長 内務次官 外務次官

八〇四 九月一日 在奉天落合總領事ヨリ
大隈兼任外務大臣宛

浜名寬祐及穆本瑞間ノ土地商租契約送付ノ件
附屬書 八月十八日付右土地商租契約書及附帶契約書並
保証狀

公第二二八号 九月八日（接受）

在奉天

總領事 落合謙太郎（印）

外務大臣伯爵 大隈重信殿

日支人間土地商租ニ關スル件

蒙古ノ地質耕種ニ適セサルモノ専カラス勢牧畜ニ倚リ衣食セサルヲ得サルモ蒙人ハ精細ノ研究ヲ行ハス未タ事

業ノ發達ヲ見ス各蒙盟長官ヲシテ大ニ之ヲ提倡セシメ並

中蒙銀行ヨリ補助金ヲ貸与シテ牧畜ノ実力ヲ裕ニシ事業ノ發達ヲ期ス

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件 八〇四

九九九

十一、牧畜ニ關スル件

ヲ以テ墾荒獎励章程ニ照シ各地人民ヲ招徠シ開墾ニ從事

セシメ政府ニ於テ維持方ヲ講シ凍餒ノ虞ナカラシム原有ノ墾務局ヲ拡張シテ墾務ノ發達ヲ促シ更ニ各蒙族王公ト

蒙荒開放弁法ヲ定メ蒙古農場試驗場ヲ組織シ以テ農事ヲ講究ス

大正四年九月一日

在奉天

總領事 落合謙太郎（印）

日支新條約ノ実施ニ伴ヒ本邦人ノ内地居地居住並ニ土地商

一一 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

八〇四

一〇〇〇

租等ニ就キ當館ニ於テ注意致尙ホ本邦人カ其手続等ニツキ伺出ツルモノ往々有之候モ目下ノ処當地方ニ於テ広大ナル区域ニツキ土地商租ノ契約ヲ完了シタルモノハ別添写浜名寛祐穆本瑞間ノモノニ過キス候尚右浜名ノ分ハ新條約実施前ニ或關係上取急キ訂約シタル趣ニ付右契約第一條中ニ「新條約実施ノ日ヨリ」ナル文字ヲ加ヘシメ認証シタル次第ニ有之候

御参考迄及稟報候 敬具
(欄外註記)
「浜名ハ元都督府主計長ナリ」
(附屬書)

土地商租契約書
附帶契約書
(認證願三添付ノ副本)
濱名 寛祐

甲ハ乙ニ對シ前條滿參拾箇年分ノ土地商租料トシテ日貨金箇年間甲ハ乙ヨリ乙ノ所領地ヲ商租スルコトヲ約シ乙ハ本契約期間如何ナル事由アリトモ其ノ土地ヲ他ニ賣却シ若クハ贈與シ又ハ抵當ト爲シ及ヒ他ニ複租セシムルコト莫キヲ約ス

ヲ契約ス

第壹條

日支兩國間ニ訂結セラレタル新條約實施ノ日ヨリ向フ參拾箇年間甲ハ乙ヨリ乙ノ所領地ヲ商租スルコトヲ約シ乙ハ本契約期間如何ナル事由アリトモ其ノ土地ヲ他ニ賣却シ若クハ贈與シ又ハ抵當ト爲シ及ヒ他ニ複租セシムルコト莫キヲ約ス

第貳條

甲ハ乙ニ於テ商租中ハ商租地ノ收入ヨリ純益ノ拾分之壹ヲ毎年拾萬圓ヲ此際一時ニ支出交付ス

本契約書ノ記名調印ヲ以テ右金員ノ授受ヲ了セル證據ト爲ス

第參條

甲ニ於テ商租中ハ商租地ノ收入ヨリ純益ノ拾分之壹ヲ毎年乙ニ支給シ香火養膳ノ用ニ充テシム

凶年飢歲兵亂等ニ因リ純益ヲ舉ケ難キ時ニ於テモ甲ハ尚未好意ヲ以テ乙ノ衣食ヲ資ク可シ

第四條

本商租ニ因リ甲ノ獲得セル権利ハ管理經營收益其ノ他一切

ノ権利ニシテ日支兩國間ノ條約及ヒ其ノ他ノ法令若クハ慣例又ハ默認等ニ因リ日本人トシテ獲ラル権利ノ悉皆及其ノ最優ナルモノトス

第五條

第壹條ニ依リ甲ノ商租セル土地ハ遼中縣管内左記拾八箇村ヲ包有聯結セル東西參拾支里南北貳拾支里ノ全地域トス其ノ地區疆界ハ後條圖書ノ示ス處ニ據ル

土堡子、平安堡、金家二道溝、後二道溝、葵伯街、八砂堡、高歷莊子、蘇家庵、木耳崗、曹家窩棚、張家窩棚、兔兒塚、太平莊、前二道溝、匡家窩棚、大費家窩棚、小費家窩棚、丁家窩棚、以上拾八箇村

第六條

本契約訂結以前ノ事故ニシテ訂結後甲ニ煩累ヲ及ボスモノハ總テ乙ニ於テ負擔處辦スルモノトス又契約訂結前後ニ關ハラス乙ノ名ニ於テ當然負擔處辦スヘキモノ亦同シ但シ乙ノ處辦ヲ待ソコト能ハサルモノハ甲ニ於テ代辦ス

第七條

商租期限滿了ニ至レハ無條件ニテ本商租ヲ更ニ繼續スルモノトス

第八條

本契約書ハ日華兩文ニ作製シ記名調印ノ上日本文ハ甲華文ハ乙之ヲ所持ス
後來兩文ノ間ニ疑義ヲ生スル時ハ日本文ニ據リ解決ス

日本大正四年八月十八日

中華民國四年八月十八日

太平寺寺章 濱名 寛祐(印)
穆本 瑞(母印)

一、地領

一一 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

八〇四

附帶契約

一一〇一

中華民國四年八月十八日

一〇〇二

日本濱名寛祐（甲）及ヒ民國穆本瑞（乙）ハ日本大正四年八月拾八日兩者ノ間ニ訂結セル土地商租契約ニ附帶シテ更ニ左ノ條件ヲ契約ス

第一條

後來日支兩國間ノ條約改訂ニ因リ若クハ法令ノ改正或ハ其ノ他ノ事體ニ由リ日本人トシテ土地ニ就テ獲ラル権利現在ヨリ更ニ以上ニ擴張セラレタル時ハ土地商租契約第四條ノ甲ノ権利ハ同時ニ其擴張セラレタル権利ノ最優及ヒ最長期ノモノニ更改セラレタルモノトス

第二條

前條ニ因リ甲ノ権利擴張セラレタル時ハ其ノ擴張セラレタル権利ノ本旨及効力ニ矛盾スル甲乙間ノ契約條項ハ自然終熄スルモノトス

第三條

本契約ハ日華兩文ニ作製シ記名調印ノ上日文ハ甲華文ハ乙之ヲ所持ス
後來右兩文ノ間ニ疑義ヲ生スルコトアル時ハ日文ニ據り解決ス

日本大正四年八月十八日

大正四年八月十八日

奉天小西邊門外住

井 深 彦三郎

奉天十間房第六區警第四六號

山 根 佐喜蔵

奉天縣老達戾申

趙 洪 灣

大體兼任外務大臣ヨリ
(在滿洲各領事及分館主任)
哈爾賓及齊々哈爾ヲ除ク宛

八〇五 九月十六日

南滿洲及東部内蒙古條約第五条ニ関スル件

公信政機密合送第一三二号

南滿洲及東部内蒙古ニ關スル條約第五条ノ規定ニ關シ左記

ノ諸点御承知置相成度此段申添候也

追テ同条約第二条土地商租ノ規定ハ素ト從来ノ所謂未開放地ニノミ適用セントスルニ在リタルモノナルモ過般日支交渉中我方ヨリスル趣旨ヲ明白ニ支那側ニ言明シタル

コトモナク又支那側ヨリモ特ニ斯ル申入ヲ受ケタルコトモ無之加之右土地商租權ハ御承知ノ通り其實質所有權ニ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

保證狀

太平寺寺章

濱名 寛祐（印）

穆 本 瑞（印）

民國奉天太平寺寺主
僧 穆 本 瑞
貳拾四歲

濱名寛祐ト右本瑞トノ契約ニ於テ私共ハ該契約書ニ押印ヲ捺シ及寺印ヲ捺セル其ノ當人ガ太平寺寺主タル本人即チ本瑞タルニ相違ナキコトヲ保證スル者ニ有之候

即チ井深彦三郎ハ舊クヨリ奉天ニ居住來往シタル關係ヨリ本瑞ヲ承知シ居ル者ニ候又山根佐喜蔵ハ榎原農場ノ爲メ嘗テ太平寺借用ノ衝ニ當リ且ツ佐喜蔵自己ノ名義ニ於テ今日迄借用ヲ繼續シ本瑞トハ家屋貸借關係ノ間柄ニ候ヘハ本瑞ヲ熟知スルハ勿論同寺ノ印章ヲモ承知致候

民國人趙洪斌ハ本瑞ノ叔父ニシテ同人ノ生時ヨリ承知シ且ツ之ヲ保護致候者從ツテ太平寺ノ印章モ熟知スル者ニ候右三名ニテ濱名寛祐ト穆本瑞トノ間ニ於ケル契約書ニ就テ本瑞ノ押印及寺印ハ同人ノ捺セルニ相違ナキヲ保證候也

左記

一、同条約第五条第一項旅券登録ニ關スル規定ニ付テ

- (1) 同項ニ所謂「例規ニ依リ」トハ条約ニ基ク從来ノ成例（明治二十九年日清通商航海條約第六条参照）ニ從フ
ノ義ニシテ從テ又同項規定ノ旅券モ何等新ナル形式ヲ具ヘタルモノヲ指スニアラスシテ從来ノ所謂護照ノ意ナリ
- (2) 同項ニ所謂旅券ノ登録トハ日本國臣民ニ於テ其目的地ニ到達後其携帶セル旅券ヲ當該地方官ニ提出シ地方官

ハ之ヲ登録スルノ義ナリ

(ハ)尚右旅券登録ノ件ハ從來ノ所謂未開放地ニノミ限ル事項ナリ但シ旅券ニ關スル日清通商航海条約第六条特ニ

同条末段開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日間ヲ限り旅券ノ携帶ヲ要セサル規定ノ如キハ新条約ニヨリ何等影響ヲ受ケス從来通り実行セラルヘキハ申ス迄モナシ右

ハ前記ノ通リ南満洲及東部内蒙古ニ關スル条約第五条第一項ニ「例規ニ依リ」トアルニ見テモ明ナルモ為念

茲三附記ス
(イ)今回ノ日支交渉中四月八日ノ第二十回會議ノ際陸外交総長ハ日置公使ニ對シ旅券登録ノ件ハ從來ノ成例ニ依ルノ外何等故意ニ制限ヲ加ヘントスルカ如キ趣旨ニア

ラス之ニヨリ一面日本國民ノ保護ニ便ニシ他面内地居住日本國民ノ所在ヲ明ニシ置クノ必要アルニ依ルモノニシテ支那官憲ハ猥リニ日本國領事館ノ發給セル旅券ノ副署ヲ拒ミ又ハ之ヲ遲延セシムルカ如キコト無之ハ總長ノ責任ニ於テ之ヲ言明スル旨並旅券携帶者力目地ニ到達シタルトキハ地方官ニ届出ヲナシ地方官ハ單ニ之ヲ帳簿ニ登録スレハ足ル次第ニシテ敢テ他意ナ

キコトハ之亦責任ヲ以テ言明スル旨ヲ述ヘタリ

一、同条約第五条ノ裁判制度警察法令及課稅ニ關スル規定ニ付テ

本條規定ノ裁判制度並ニ本邦人カ支那ノ警察法令及課

稅ニ服スルノ仕組ハ從來ノ所謂未開放地ニ於テ新ニ本

邦人ノ居住権ヲ認メラレタル結果之力居住ニ伴フ制度

トシテ新条約ニヨリ設定セラレタルモノニ属シ從テ同

規定ハ從來ノ所謂未開放地ニ限り適用セラルヘキモノ

ナルコト勿論ナリ故ニ又開放地ニ於ケル裁判警察及租

稅ノ件ハ今後ト雖從來ノ取扱振ト何等異ナル所ナシ即

チ開放地ニ於テハ依然現行ノ日清通商航海条約ノ規定

ニ準拠スヘキモノトス

本件裁判制度、警察法令及課稅ニ關スル規定力所謂未開放地ニノミ限ラルモノナルコトニ付テハ前記旅券登錄ニ關スル陸外交總長ノ言明ノ次第ト共ニ為念何等カノ形式ニテ文書ニ残サムコトハ今回ノ交渉中支那側ニ求メタル處五月十五日陸外交總長ハ日置公使ニ對シ右ノ諸点ハ當然ノコトニシテ特ニ文書ニ残スノ必要ナシト述へ結局前記ノ諸点ハ之ヲ文書ニ残スニ至ラサリ

シモノナリ又五月十四日支那政府ニ於テ發表シタル日支交渉顛末書ニ於テモ右諸点カ所謂未開放地ニノミ関

スルモノナルコトヲ説明シ居レリ之亦参考ニ資スルニ足ルヘシ

八〇六 十月四日 落合奉天總領事(在京)ヨリ

大隈兼任外務大臣宛

奉天省財政、新條約実施等ニ付段芝貴上將軍

トノ会談要領報告ノ件

(十月十三日接受)

機密号外

大正四年十月四日

在京

総領事 落合 謙太郎

外務大臣伯爵 大隈重信殿

段上將軍兼巡按使ヲ往訪談話要領報告ノ件

過般段芝貴上將軍着任後一応ノ訪問交換ヲ了シタルモ其間

同將軍就任ニ伴フ諸用事一應落着スルヲ俟チ當方面ノコトニツキ談話ヲ試ルコトトナスヘキ旨申合セタルノミニテ本

官帰朝スルコトトナリ尋テ又同將軍巡按使ヲ兼任シ名実共

奉天省文武各般ノ責任ヲ負フコトトナリタルヲ以テ九月二

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

計ヒ現今迄繼續シ来レリ尚ホ此事ニ就テハ北京ニ於テモ山座公使時代ニ外交部ニ申入レラレタル次第三テ支那側ニテハ充分明白ノコトナラサルヘカラス思フニ今回張前巡按使（元奇）ヨリ引繼ニ際シ右ノ談話アリタルコトト信ス同巡按使時代ニ於テ満鉄ニ対スル借款満期ニ当リ之ヲ返済セラル議アリタルトキ本官ハ満鉄共相談ノ上満鉄ニ於テ返金ヲ急キ居ラサルニヨリ当省財政ノ都合上延期ヲ欲セラレナハルモノハ之ヲ返還セサルヘカラサルモノト信シ既ニ返済ノ準備整ヒ居ル旨ヲ語リ又本官ヨリ独逸側ノ武器購入費ノ未払額等別国筋関係ノ債務ノコトニツキ注意シタルニ対シ張元奇氏ハ右武器ノ買入代金未払額ノコトハ先方ヨリ武器引渡期ニ違約ノ点モアリ旁北京ニ於テ談合ノ上本年末迄ニハ月賦支払ヲ為スコトトナリ居リ其ノ仕払ハ完全ニ為シ得ヘキ確信アル由ヲ告ケ同時ニ交通銀行借款ノコトヲ挙ヶ右ハ英國側関係ノモノニテ其ノ返還方亦充分ノ見込アル旨弁解セラレタルニ付本官ハ日本ニ予メ相談無クシテ外債ヲ起サル趣旨ハ最誠実ニ實行セラレツツアリタルモノト信シ居リタル關係上英國筋ヨリ借款云々ノ言ニツキ推問スル所ア

リタルニ同巡按使ハ右ハ北京政府ヨリ借入レタルモノニテ
資金ノ供給者ハ英國筋ヨリ出テ居リタルモノノ由ナルモ當
地ノ官憲ハ政府ニ返還スレハ足ルモノニテ英國筋トハ直接
關係ナシ從テ約ニ反セルモノニアラス之レ亦返還期ニ至ラ
ハ必ス返還スヘシトノ弁明アリシカ是レ亦引繼ノ際談話ア
リタルヘク我方ニテハ右ノ説明通リ実行サルルコトヲ期待
シ居レル旨説明シ次ニ本官力前ニ張錫鑾民政長兼任中尽力
シタル当省借款談ノコトヲ擧ケ最初趙清翼財政司長ヨリ百
万円ノ借款相談ヲ受ケ許世英氏民政長トシテ來任後王財政
局長ヨリ五百万円ノ談話アリ更ニ張翼廷財政厅長トナリ五
百万円ノ借款談進行セシカ其後都合アリテ中絶今日ニ及ヒ
居ルモノナリ右借款談ハ中絶シ居ルモ當省ノ借款談ニ尽力
シタル行掛リハ決シテ止ミタルニアラス金額モ必ス五百万
円ニ限リタル訳ニアラサレハ今後借款ノ必要アラハ必ス先
ツ日本側ニ相談セラルルコトヲ期待ス況ヤ此回ノ新條約ニ
於テ當省借款ニ關スル一項ノ挿入セラルアリ條約ノ成文
カ完全ニ实行サルヘキハ勿論ナルカ上述ノ如キ沿革ニ顧ミ
文字ノミナラス其精神ニテ取扱ハレンコトヲ期望スト述ヘ
タルニ段芝貴ハ當省へ來任日尚ホ淺ク殊ニ巡按使ヲ兼ネ引

省財政ノコトモ未タ十分ニ知悉セス又本官ヨリ為セル談話ノ件ニ就テハ張前巡按使ヨリ何等ノ談話ナカリシモ日本カ當方面ニ特種ノ地位關係ヲ有スルコトハ十分ニ解シ居リ且ツ新條約ニモ規定スル所アル次第三テ条約ノ範囲ニ於テ誠実ニ之ヲ實行スヘク又当省財政ニ就テハ本官ノ熟知スルカラ如キ状態ナルヲ以テ何時外債ヲ仰クノ必要ナキヲ保シ難キヲ以テ此場合ニハ先ツ日本側ニ商議スヘシト答ヘタリ本官ハ（第二）ニ説明スヘキコトハ是迄未開放地ナリシ開市場及鉄道附屬地以外ニ多数ノ日本人及日本臣民タル朝鮮人ノ在住スルモノ多カリンシコトニツキ交渉アリシコトナリ滿洲ノ内地ニ日本内地人及朝鮮人ノ多数居住スルモノアリ特ニ朝鮮人ハ數十万ヲ以テ數フルニ至レル次第ナルカ之ニ闕シ往年支那官憲ハ條約ノ規定ヲ云々シテ退去方ヲ云為シ一二ノ地方ノ如キハ退去ヲ強制セントセルコトアリタルガ先年張都督ニ対シ此等内地居住者ハ戦役時代ノ關係及経済ノ事情等ヨリ勢ヒ満洲内地ニ居住ノ姿トナリ彼等ハ既ニ相当資本ヲ投シ商業農業等ニ從事シ多年ヲ経過セルモノニシテ單ニ條約ヲ云々シテ急ニ退去セメントスルカ如キハ不穢當

ナルノミナラス到底実行スル能ハス無理ニ実行セバ内地居住者ノ蒙ル損害多大ニシテ貴方ニテモ之ヲ黙過スル能ハサクソレ迄ハ内地ニ在リテ犯罪ノ行為ナク正当職業ニ従事シ地方ノ治安ニ害ヲ為ササルモノハ之ニ退去ヲ強ルカ如キコト無キ様致スヘキ旨ヲ申入レテ其ノ承諾ヲ得爾後行政長官更迭ニ際シテハ右ノ約諾ヲ引繼ノ際特ニ継続スルコトトシテ今日ニ至レリ内地居住ノコトハ新條約ニ於テ規定ヲ見ルニ至リタルガ其以前右ノ様ノ沿革アリ然ルニ新條約成立シテ本邦人力土地家屋ヲ租借セントスルニ際シ之ヲ妨害セントスルモノアルヤノ情報一二ニ止マラサルハ本官ノ了解ニ苦ム所ナリ元來右様ノコトニ就キ貴方官憲ニ於テ本邦人ガ居住シ土地家屋ヲ借入レントスルニ就テハ之ヲ妨害セサル軍ハ多數ノ地方官中或ハ條約ノ意義ヲ誤解スルアリ又ハ趣旨ノ徹底セサルモノアルハ免カレサルヘキヲ以テ一般ニ斯第ナルニ右様ノ事実アルハ甚タ不可ナリト語リタルニ段將ルコト無キ様戒飭スヘキ旨ヲ答ヘタリ本官ハ（第三）ニ鉱

山ノ件ニ談及シ新條約締結ト共ニ指定セラレタル鉱山ハソレゾレ本邦人ニ於テ採掘ヲ出願セント目下其ノ手続中ナルモノ多シ鞍山站ノ鉱山ハ今回ノ條約談判以前ヨリ既ニ久シク本邦人ノ關係セル處ニテ一旦必ス許可アルヘシトノ内沙汰迄モ受ケタルモノナルカ鉄鉱国有ニ対スル關係ヨリ彼我交渉中新條約締結ノ際指定鉱山トナリタルニ至リタルモノナルガ前記ノ如ク既ニ久シキ間本邦人ノ關係セルモノニシテ今回指定トナリタルニ就テハ遠カラス關係者ヨリ出願スベキヲ以テ其節ハ速ニ認可セラルコト勿論ナリト期ス本溪県牛心台炭坑モ今回指定セラレタルガ右ハ十余年前即チ日露戰役當時軍政中ニ日本人ノ之ニ着手シタルモノアリ其ノ關係ニツキ數多ノ沿革ヲ經テ指定鉱山トナリタルモノナルカ只該地域ニ條約成立後許可ヲ得又ハ許可ヲ得シテ支那人ノ採掘セルモノ生ジタルヤニテ關係者苦情ヲ唱ヘ居レリ是ハ匡正及取締ヲ要スヘシ又田付溝炭坑ノ如キモ既ニ關係者アリ近日出願スヘキ旨述ヘタルニ段芝貴ハ既ニ條約ニ明記アリ條約ノ規定スル所ニ從ヒ取計フヘキハ無論ナリト答ヘタリ（最後）ニ警察ノコトニツキ説明ヲ試ミ從前ノ慣行ヲ説キテ今回ノ新條約ニ關聯シ支那側ニ於テ鐵道附屬

註 田付溝炭坑トハ田師伝溝炭坑ニ同シ尚同炭坑ニ付テハ前掲四九二文書参照

八〇七 十月八日 在奉天矢田總領事代理ヨリ
大隈兼任外務大臣宛（電報）

中国人殴打致死事件ノ裁判傍聴方中國側ヨリ

在任當時日本人ノ教習ヲ聘シ改善効ヲ取メタル経験アルガ当省ニテハ一時ニ斯ノ如クナル能ハズ警察改良ニ關シ町野顧問ヨリ意見ノ提出アラバ事情ノ許ス限り努メテ之レヲ採用実施スヘク一方胡匪ノ跳梁ヲ防キ略ホ小康ヲ得タル上漸ヲ追ヒテ顧問ヲモ招聘スル所アルヘク尚ホ其ノ期ニ至ラバ後任總領事ト相談又ハ依頼スル所アルベク将来ニ於テハ和衷協同以テ両國ニ亘ルノ事項ヲ條約ノ範囲ニ於テ確実ニ之レヲ遵行スル所アルヘシト答ヘ條約ノ範囲内云々ノ言ヲ再三再四繰返セルヲ以テ本官ハ條約ノ規定ガ其通り實行サルヘキハ勿論ナルガ當地方ニ於テハ前陳ノ如ク條約ノ明文以外ニ多年慣行セラレタルモノアリ併セテ考究ヲ要スヘシト述ヘタルニ段ハ本官ノ意思ハ十分ニ了解シタル旨ヲ答ヘ居リ候

右段芝貴トノ談話概略為御参考及報告候 敬具

一二 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ対満施策ニ關スル件

八〇七

一〇〇九

地外ニ於ケル日本警察ノ施設即當奉天城内ニ於ケル派出所撤回ヲ要求シ又ハ附屬地外ニ於テ日本人ニ対シ犯罪アリタル支那人ヲ日本警察ニ於テ検挙スルコトニ対シ抗議スル如キ孰レモ慣行ニ外ナラサルコトヲ囂々攻撃セラルモノニシテ我方ニテハ首肯スルコト能ハス又内地ニ警察機關ノ設置アルコトニツキ云々セラレタルコトアルモ是亦ソレソレ沿革アリ且久シキニ涉リ何等故障ナク行ハレ來リタルモノ私見トシテ述べニ當省ノ支那警察ガ改善ヲ要スヘキモノナルコトハ明ナル次第ナリ既ニ前任張將軍ニ於テハ將軍行署ノ町野顧問ヲシテ巡按使行署顧問ヲ兼ネシメ警察ノ事ニ關与セシムルコトトセラレ同顧問ハ既ニ目下主要地點ニ於ケル警察事務ヲ実地ニ調査セラレツツアレバ其内必ラズ同氏ヨリ警察改革ニ関ス諸種ノ意見ヲ呈出セラルヘク將軍亦必ス其ノ意見ヲ充分ニ考量可及的採用セラルルコトト信スルガ斯ル場合ニ於テ警察改良ノ方法ノ一トシテ尚多數ノ本邦人ヲ傭聘セラルコトヲ必要トスルコトアラン大体ニ於テ將軍ノ所見如何ト問ヒタルニ段將軍ハ新條約ノ結果日本人内地ニ居住スルコトトナリタルニ就テハ支那官憲ニ於テ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

一〇一〇

後者ノ場合ニハ我ニ於テ從來審判庁等ノ司法機關ヲ認メサ
リシ成行ニ顧ミ警察厅ヨリノ派員ヲ承認スルコト如何アラ
ンカト存セラルル處我方ニ於テモ領事官以外ニ裁判官ヲ置
キ同条約第五条ノ裁判ヲ為サシメントノ御意向モアルヤニ

承ハルニ付旁此際支那側派遣員資格ニ関シテモ御詮議相成

様致シタシ何レニモセヨ本件ハ一新事例ヲ開ク儀ニシテ慎

重審議ヲ要スルモノト存スルニ付取扱振ニ関シ何分ノ義御

電訓ヲ請フ在支公使ヘ電報シ閼東都督ヘ郵報ス
キ付旁此際支那側派遣員資格ニ関シテモ御詮議相成

様致シタシ何レニモセヨ本件ハ一新事例ヲ開ク儀ニシテ慎

重審議ヲ要スルモノト存スルニ付取扱振ニ関シ何分ノ義御

電訓ヲ請フ在支公使ヘ電報シ閼東都督ヘ郵報ス

八〇八 十月十一日 在奉天矢田總領事代理宛(電報)

今回限リノ措置トシテ中国側ノ予審傍聴差支

ナキ旨回訓ノ件

第一一八号

貴電第一一八二号ニ閼シ

南滿洲ニ於ケル新裁判制度ニ關シテハ目下詮議中ニ属スル

ヲ以テ右確定ニ至ル迄ハ本件ノ如ク主義上ノ決定ニ關係アル事件ニ付今日直チニ我方ノ意見ヲ定ムルコト困難ナルモ本件ハ差迫リタル事情モアルヘキニ付他日先例トシテ引用スルコトナク單ニ本件限りノ措置タル了解ノ下ニ支那側ノ

貴電第一一八二号ニ閼シ公文回答發送前他用ヲ以テ本官ヲ來訪セル馬交渉署長ニ對シ為念支那側公文ノ意味ヲ確メタル所馬ハ右公文ヘ地方審判庁ヨリノ請求ヲ取次タルモノナル

カ同序ノ意味ハ公判ニ臨席傍聴ヲ要求スル次第ニシテ勿論

予審ニ関スルモノニアラサルヘシト明言セリ然ルニ本件犯

罪ノ性質上予審終結ヲ俟テ閼東都督府地方法院ノ公判ニ附

スヘキモノナレハ支那側要求ハ同法院ノ公判ニ臨席ヲ求ム

ル結果トナル次第ナルカ其辺ハ如何取計可然ヤ又當館ノ予

審ニ支那側ノ臨席ヲ許ストキハ其密行主義ニモ反ストノ理

由ヲ以テ地方法院ニ於テ予審ノ効力ニ付何等問題ヲ生スル

懸念ナキヤ本官回答振ト共ニ併テ何分ノ義重テ至急御電訓

ヲ請フ

申出ニ從ヒ貴館ニ於ケル本件予審ニ付相当ノ席ニ於テ支那側ノ臨席傍聴ヲ許シ差支ナン

八〇九 十月十三日 在奉天矢田總領事代理ヨリ

中国側ヨリ閼東都督府地方法院ノ公判傍聴要

請ノ場合ニ對スル処置ニ付請訓ノ件

第一九〇号

貴電第一一八号ニ閼シ公文回答發送前他用ヲ以テ本官ヲ來

訪セル馬交渉署長ニ對シ為念支那側公文ノ意味ヲ確メタル

所馬ハ右公文ヘ地方審判庁ヨリノ請求ヲ取次タルモノナル

カ同序ノ意味ハ公判ニ臨席傍聴ヲ要求スル次第ニシテ勿論

予審ニ關スルモノニアラサルヘシト明言セリ然ルニ本件犯

罪ノ性質上予審終結ヲ俟テ閼東都督府地方法院ノ公判ニ附

スヘキモノナレハ支那側要求ハ同法院ノ公判ニ臨席ヲ求ム

ル結果トナル次第ナルカ其辺ハ如何取計可然ヤ又當館ノ予

審ニ支那側ノ臨席ヲ許ストキハ其密行主義ニモ反ストノ理

由ヲ以テ地方法院ニ於テ予審ノ効力ニ付何等問題ヲ生スル

懸念ナキヤ本官回答振ト共ニ併テ何分ノ義重テ至急御電訓

ヲ請フ

八一〇 十月二十六日 在奉天矢田總領事代理公使宛
内地雜居等新條約ノ実施ヲ地方官憲妨碍セル
二付警告方訓令ノ件

附屬書一 十月五日附在奉天矢田總領事代理ヨリ大隈兼

任外務大臣宛機密公第二七〇号

二 十月一日附在長春山内領事ヨリ大隈兼任外務

大臣宛公信発第一一四号

公信機密送第二二七号

本件ニ關シテハ新條約實施以前已ニ在滿洲各領事官及滿鉄
公所等ヨリ諸種ノ情報アリタルニ依リ去ル八月十八日附機
密第二五五号日置公使來信ト入レ達ヒニ當方ヨリ同月二十
三日附政機密送第一六一号ヲ以テ同公使ヘ宛テ支那當局ヘ
警告方及訓令置タル次第有之右ニ付テハ當時何分ノ御措置
相成タル義ト存セラレ候處其ノ後在滿洲支那官憲ノ態度格
別改マリタル模様無之最近接到セル別紙甲号在奉天矢田總
領事代理報告及乙号在長春山内領事報告ニ依レハ支那官民
共ニ依然トシテ不理屈ナル口実ノ下ニ雜居地ニ於ケル本邦
人家屋賃借等ニ關シ種々妨害ヲ試ミ居ルノミナラス錦州巡
警局總務股員ノ如キハ新條約ニ依リ日本人ノ居住営業ハ隨

意ナランモ未タ巡按使ヨリ何等ノ命令ニ接セサルヲ以テ日
本人ノ営業ハ認ムルコト能ハスト明言シ又懷德縣支那官憲
ハ本邦人ノ内地雜居細則協定セラレ居ラサルニ付其ノ居住
ヲ承認スル能ハストテ支那人ニ對シ本邦人ヘノ家屋貸付禁
止ヲ厳命セシ趣ニ有之候然ルニ如斯ハ甚ダ了解シガタキ申
分ニテ既ニ新條約カ公布セラレ且已テニ其実施期日ニ入り
タル今日ニ於テハ上級官庁ノ命令無ケレハトテ又雜居細則
ノ協定ナケレハトテ支那地方官憲力勝手ニ條約規定ニ違反
スルノ处置行動ヲ執リ得ヘキ義ニ無之ハ申迄モ無之候何レ
ニ致セ本邦商民ハ條約ノ明文及精神ニ基キ南滿東蒙ニ於テ
其ノ認メラレタル權利ニ依リ各種業務ノ經營ニ着手致スヘ
ク而シテ右經營ニ對シ支那官民ニシテ不法ニ妨害ヲ加ヘ損
害ヲ与フルカ如キコトアラハ支那政府ハ之ニ對シ重大ナル
條約違反ノ責任ヲ負フヘキモノニ有之候抑モ支那政府カ國
際ノ通義ヲ重ンシ今次兩國間ニ締結セラレタル條約上ノ義
務ヲ誠実ニ遵守スルヤ否ヤハ帝国政府ノ嚴密注視ヲ怠ラサ
ル所タルノミナラス支那官民ノ態度如何ハ直接痛切ニ帝国
臣民ニ於テ利害ヲ感スル次第ナレハ此種支那官憲ノ措置力
我国民感情ニ悪影響ヲ及ホシ惹テ兩國ノ国交ニ禍スル所ナ

一一 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

八一〇

一一一

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

八一〇

邦人借家営業ト支那官民ノ感想

奉天小西辺門外加藤商会店員

客店営業ノ目的 伯野常治 杉尾伝次郎

撫順千金葉種、雜貨商

客店開業ノ目的 伯野常治

新民屯自称質屋業（元奉天領事館看守人）

質屋開業ノ目的 長廣鉄之助

シトモ断言致シ難ク候就テハ貴官ハ前記八月二十三日附政
機密送第一六一号ノ趣旨ヲモ來照セラレ且別紙添附ノ報告
書写記載事実ヲモ篤ト御查閱ノ上支那当局者ニ対シ不都合
ノ点ヲ指摘セラレ併セテ前述ノ次第ヲモ申入レラレ此際速
ニ地方官憲ヲシテ條約違反ノ行為ナカラシムル様相当措置
アリ度旨重ネテ嚴重御警告相成度此段及訓令候也

（附屬書）

甲号 機密公第二七〇号

大正四年十月五日

在奉天總領事代理 矢田七太郎

外務大臣伯爵 大隈重信殿

情報報告ノ件

在錦州後藤祿郎ヨリ別紙ノ通り報告致越候ニ付茲ニ同写
及御送附候条御查閱相成度此段申進候 敬具

（別紙）

錦第五十九号

大正四年十月二日

在錦州後藤祿郎（註）

移シ邦人ノ經營スル所トナレリ茲ニ於テ彼等邦人ハ本日口
頭ヲ以テ支那巡警局ニ其ノ旨届ケ出テタルニ所長ハ朱黒竜
江將軍ヲ見送り出奉シ不在中ニ付王總務股員ハ彼等邦人ニ語リテ曰ク、
新條約ニ依リ日本人ノ居住、營業ハ隨意ナランモ當錦州ハ
未タ奉天巡按使ヨリ何等ノ命令ニ接セサルヲ以テ日本人ノ
營業ハ認ムルコト能ハス又縣知事及警察所長不在ナルモ其
ノ意亦同一ナルヘシ云々ト語レリ、之レニ依リ之レヲ見レ
ハ支那官憲ハ未タ當地ニ於テ邦人ノ居住、營業權ヲ認メサ
ルモノノ如シ
而ルニ杉尾等ニ於テハ已テニ再三再四借家契約成立シ居内
修繕セントスルヤ日本人ノ營業者タルノ故ヲ以テ直チニ解
約セラレ不尠損失ヲ蒙リシニ付キ今亦解約退去スルハ彼等
ノ忍ヒサル處而モ邦人ノ将来發展上至大ノ悪例ヲ存スルモ
ノナリトシ今回ハ如何ナル事件口述ヲ以テ解約ヲ迫ルコト
アルモ断シテ之ニ応セス依然トシテ居坐リ動カサル意ヲ
決シ居ルモノノ如シ故ニ後日或ハ交渉問題ヲ惹起スルヤモ
計リ難キニ付キ予メ参考迄テ二報告ス

一二 近来邦人ノ來錦スルモノ極メ多ク中ニハ新民屯庄司
計リ難キニ付キ予メ参考迄テ二報告ス

八一〇

虎藏ノ質屋、天津河野忠路ノ雜貨、奉天日向新ノ羊毛商、
都督府民政部員林卓爾ノ赤十字病院設置、營口根本永雄ノ
毛皮商等ト稍々確美ナルモノアリ相当ノ資金ヲ以テ確タル
商業ヲ當マントシ支那人家屋ノ借り入レニ勉ムルモ屋主ニ
於テ日本人タル故ヲ以テ都ヘテ拒絶セラレ為メニ空シク帰
去シツツアリ實ニ邦人ノ發展上遺憾トスル処ナリ
今其ノ家主等ノ拒絕スル所ヲ聞クニ或ハ商務会ヨリ日本人
ニ借家ヲ許スヘカラスト内命セラレタル為メナリト云フア
リ或ハ當地ハ未開放地ニ付キ外国人ノ居住ヲ許サスト云フ
アリ或ハ官憲ヨリ日本人ノ居住セシムヘカラストノ内命ア
リシカ故ナリ等稱シテ借家ヲ拒ムモノノ如シ
又官憲側ニ於テハ前記ノ如ク當錦州ノ地タルヤ未タ巡按使
ヨリ何等ノ命令ナキヲ以テ本邦人ノ居住營業ヲ認ムルヲ得
スト称シ官民共ニ邦人ノ侵入ヲ防圧シツツアルノ嫌アルナ
リ

以上ハ當地官民感想ノ一端ヲ記シタルニ過ギサルモ邦人ノ
此遼西ニ發展上面白カラサル現象ト思料セラルルニ付御參
考迄テ二報告ス

註 後藤祿郎氏ハ大正七年十月外務通訳生ニ任ゼラレタル後昭

一一 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

一一〇一三

一一 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

八一

一〇一四

和七年十二月副領事トシテ錦州在勤ヲ命ゼラレ同八年二月
ヨリ領事代理トシテ同地ニ在勤セリ

(附属書二)

乙号

大正四年十月一日

發第一一四号

在長春領事 山内四郎

内閣總理大臣兼外務大臣伯爵 大隈重信殿

邦人ノ未開放地居住ニ關シ当地道尹ニ交渉ノ

件報告

邦人竹島常吉外三名ハ游歴或ハ商工業視察ノ目的ヲ以テ曾
テ鉄嶺領事館或ハ當館ヨリ發給セシ執照ヲ携帶シ當館管内
撫德県ニ赴キ本月月初同地ニ居住セムガ為支那人之家屋ノ借入
ニ着手セシ處同地支那官憲ハ未タ邦人ノ内地難居細則協定
セラレ居ラサルニ付右邦人等ノ居住ヲ承認スル能ハストテ
家主ニ対シ家屋ヲ貸付ケサル様嚴命セシ由過日本件実情陳
述ノ為竹島常吉代表者トシテ當館ニ訴出テタル事件有之候
依テ本官ハ不取敢河野書記生ヲ当地道尹署ニ遣ハシ右不当
取扱ノ要点ヲ指摘セシメタルニ同署外交科長ハ同書記生ニ

第有之候處本件ニ關シテハ詮議ノ結果左記ノ通り決定致シ
タルニ付右様御承知相成度候

(一)予審ニ対シテモ相互ニ臨席傍聴スルコトヲ認ムルコト
(二)関東都督府地方法院等領事官以外ノ我カ裁判所ニ於テ行
フ審判ニ対シテハ支那側ノ臨席傍聴ヲ認メサルコト
(三)ニ關シテハ予審ニ臨席傍聴ヲ認メス公判ノ場合ニ限ルモ
ノト解釈スル方条文中ノ審判ナル文字ノ意義ヨリ考フルモ
又予審其ノモノノ性質ヨリ見ルモ或ハ穩当ナルヤモ知レサ
ルモ斯クテハ我カ現行領事裁判ニ關スル制度ノ結果トシテ
又領事官以外ノ裁判所ニ於ケル審判ニ対シ臨席ヲ認メサラ
ントスル關係上或ル種ノ犯罪事件ニ付テハ支那側ニ対シ全
ク臨席傍聴ノ機會ヲ与ヘサルコトトナルヘキヲ以テ特ニ予
審ノ場合ニモ之ヲ認メントスル趣旨ニ有之尤モ斯ク解釈ス
レハ我レニ於テ或ル種犯罪ノ予審ヲ行フニ当リ或ハ不都合
ヲ感スル場合アルヤモ計ラレス候得共同時ニ支那側予審ニ
対シテモ我レヨリ臨席傍聴シ得ル次第ナルカ故ニ結局支那
側ノ不完全ナル予審ニ対シ監視ノ実ヲ挙ケ得ルノ便宜アリ
寧ロ我方ニ有利ナル義ニ有之候尚条約上ノ義務トシテ予審
ニ支那國官吏ノ臨席傍聴ヲ認ムルコトハ或ハ刑事訴訟法上

対シ懷德県地方ハ奉天巡按使ノ所管区域内ナルニ付當館ヨ
リ公文ヲ以テ道尹公署ニ照会アリ次第奉天ニ移牒スヘキ旨
回答アリタル由ニ候右ニ付本官ハ郭道尹ニ対シ公文ヲ以テ
本件雜居細則ハ末タ協定シ居ラスト為スモ懷德地方ハ從來
ノ慣例ニ照シ両國官憲ニ於テ邦人ニ対スル監督容易ナルノ
ミナラス支那國政府ニ於テモ同地方ハ勿論敝国人雜居区域
内ニ属セルモノトシテ處理セラレ居ル儀ト思料スルニ付道
尹ヨリ當該官憲ニ対シ爾今邦人ノ居住妨碍ヲ加フルカ如キ
不穩當ナル措置ヲ執ラス右敝国人等ヲシテ任意居住セシム
ル様取計且本件処理ノ結果當方へ回答有度旨照会致置候条
右御承知置相成度此段報告申進候 敬具

右御承知置相成度此段報告申進候 敬具

本信写送附先 奉天總領事代理

八一 十月二十六日 石井外務大臣ヨリ 在奉天矢田總領事代理宛

刑事訴訟審判ニ付支那側ノ臨席傍聴ヲ認ムヘ

キ範囲ニ關スル件

公信政機密送第五九号

滿蒙條約第五条第二項刑事訴訟審判ニ対シ支那側ノ臨席傍
聴ヲ認許スヘキ範囲ニ關シ往電第一一二一号ヲ以テ電訓ノ次

ノ密行主義ト相容レサルヤニ思考セラレサルニ非サルモ所
謂予審ノ密行主義トハ法文ニ規定アル義ニハ無之証拠調ノ
便宜ニ基キ訴訟法全体ノ精神ヨリ推論セラルモノニテ單
ニ予審ハ公開セストノ意味ニ外ナラス予審判事ノ意見ニ依
リテハ何人ノ傍聴ヲ許スモ自由ナル次第ナレハ之力為上級
裁判所ニ於テ予審ノ効力問題起ルカ如キ懸念ハ無之義ト認
メラレ候尤モ事件ノ性質上支那國官吏カ臨席傍聴スルカ為
予審ヲ完全ニ遂行スル能ハサルカ如キ場合起ラハ右ハ特別
ノ場合トシテ其ノ予審ニ支那側ノ臨席傍聴ヲ拒否シ得ヘキ
ハ勿論ノ義ニ有之候

(二)ニ關シテハ支那國官吏ノ行フ審判ニ對シテハ總テ我ニ於
テ臨席傍聴シ得ルニ拘ラス支那側ニ対シテハ我領事官ノ行
フ審判ニ対シテノミ之ヲ許サントスルハ幾分不權衡ナルヤ
ノ嫌アルモ抑モ第五条第二項ニ於テ特ニ『日本國領事館』
ナル文字ヲ用ヒ日清通商航海條約中ニ存スル『日本國官
吏』ナル文字ヲ避ケタル所以ハ新條約締結ノ際既ニ我カ領
事裁判ニ關スル法律ニ依レハ或ル種ノ犯罪ニ付テハ領事官
ハ公判ヲ行フ能ハサルコト及関東都督府ノ法院又ハ朝鮮總
督府ノ裁判所ニ條約上ノ權利トシテ支那國官吏ヲ臨席傍聴

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ関スル件

八二三

一〇一六

セシムルハ我カ国法上ノ精神及政策上ノ見地ヨリ到底認許スヘカラサルモノタルヲ考慮シテ立案シタル次第ナレハ右ノ趣旨ニ顧ミ条約ノ文字通り支那側ノ臨席傍聴シ得ルハ領事官ノ行フ審判ノ場合ニ限ルコトトシ重罪事件ノ公判其ノ他領事官ノ行ヒタル裁判ニ対スル控訴事件上告事件カ関東都督府ノ法規又ハ朝鮮総督府ノ裁判所等ニ於テ審判セラル場合ニハ之ヲ認メサルコトニ決定致シ候

往電第一二一号補足旁々此段申進候也

八二一 十月三十日 石井外務大臣ヨリ
在牛莊三宅領事代理宛

遼西地方ハ南滿洲ノ一部ナル旨回訓ノ件

附屬書 遼西問題調査書

公信政機密送第八号

本件ニ關シ十月十三日附政機密第五一号貴信ヲ以テ御申越ノ次第有之候處我方ニ於テハ所謂遼西ノ地カ南滿洲ノ一部タルコトニ付テハ疑ヲ挾マサル次第ナルモ新条約ノ実施上右遼西問題ヲ初メ其ノ境界問題ヲ明確ニ決定スルノ必要アルヲ認メ目下南滿洲ト東部内蒙古トノ境界、南滿洲ト北滿洲トノ境界及東部内蒙古ノ範囲等ニ關シ夫々調査中ニ属ス号参照)

(二)明治三十八年十二月二十二日ノ満洲ニ關スル日清条約ノ附属協定第一条ニ於テ清国政府カ満洲ニ於テ開放スヘキ都市トシテ奉天省ノ鳳凰城、遼陽、新民屯、鈴嶺、法庫門、通江子ノ六ヶ所ヲ挙ケ居レル所右六ヶ所ノ内新民屯、法庫門ノ二ヶ所迄遼河ノ以西ニ在リ(別紙参考書乙註号参照)

(三)同協定ノ各条中日本文ニ「満洲」トアルニ対シ漢文ニハ「東三省」トアリ尚漢文ニ於テモ「満洲」ト明記セルモ

ノ一アリ

(四)同条約ノ批准書交換証書ノ日本文ニハ同条約ヲ「満洲ニ關スル日清条約」ト云ヒ漢文ニハ之ヲ「東三省事宜条約」ト記セリ又明治四十一年五月ノ鴨綠江採木公司ニ関スル取極ノ前文ノ日本文及漢文ニ於テ前記条約名ヲ記スコト右交換証書ノ場合ニ於ケルト同様ナリ

(五)明治四十二年九月四日ノ満洲五案件ニ關スル日清協約ノ前文ニ於テ「満洲ニ於テ双方共ニ關係ヲ有スル事項ヲ明確ニ議定シ」云々ト記シ其ノ第一条ニ於テ新民屯、法庫門鉄道ノ件ヲ規定シ居レリ而シテ同線ハ遼河ノ以西ニアリ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策ニ關スル件

八二一

一〇一七

ル次第ニ付本件ニ付テノミ今日強テ取急キ支那側トノ間ニ決定ヲ為スヘキ必要モ無之候得共若シ貴官ニ於テ此際支那側ニ對シ回答ヲナシ置クノ必要アリト認メラルニ於テハ貴官参考ノ為別紙ノ通り遼西問題調査書添附致置候ニヨリ右調査書第三ニ列記セル反駁ノ根拠ニ依リ可然応答セラレ差支無之尚同時ニ我方ニ於テ遼西ヲ南滿洲ノ一部ナリトル根拠トシテハ同調査書第一ニ記載セル各事項ヲ支那側ニ説示セラレ新条約ハ當然遼西地方ニモ適用セラルヘキ次第ニ付同地方ニ居住營業セントスル本邦人ニ対シ何等妨害的措置ニ出ヅルコトナキ様嚴重支那官憲ニ申入レラレ度此段申進候也

本信写送付先 在支小幡代理公使 在奉天 矢田總領事代理

(附屬書)

遼西問題調査書

第一 遼河以西ヲ南滿洲ノ一部ナリトスル根拠(一)鉛山採掘ニ關スル新条約關係公文ニ於テ奉天省錦縣ノ暖池塘ヲ南滿洲ニ於ケル鉛山ノ一二數ヘ居レル地同鉛山ハ遼河ヨリ遙カニ西方ニ在リ(別紙参考書甲号註参照)

(一)同外註記
「朝陽ハ蒙古ニ在ルモ錦州ハ奉天省即チ満洲ノ一部ニ在リ」(参考)

(二)一千九百二年四月八日ノ満洲ニ關スル露清条約(満洲撤

兵) ノ各条中仮文及露文ニ於テ「満洲」トアルニ対シ漢文ニハ「東三省」トアリ

(二) 同条約第二条ニ於テ仮文ニハ「満洲ノ東部」露文ニハ「南満洲」トアルニ対シ漢文ニハ「東三省南段」トアリ

(三) 同条約第二条(仮文及露文)ニ於テ満洲(漢文ニハ東三省トアリ)駐屯露軍ノ撤退ヲ三期ニ分チ第一期ニ於テ遼河ニ至ル奉天省ノ南西部ニ在ル部隊ヲ撤退セシムヘキコトヲ規定シアル處遼河ニ至ル奉天省ノ南西部トハ即所謂遼西ヲ指ス(別紙参考書丁号^(註)参照)

註 別紙参考書甲、乙、丙、丁ノ各号ヲ省略ス但シ右甲号ニ付

テハ日本外交文書大正四年第三冊ニ採録セラル南満洲及

東部内蒙古ニ關スル日支条約ノ關係交換公文ノ丙号ヲ、右

乙号ニ付テハ日本外交文書第三十八卷第一冊一四三文書ノ

附記ニヨ、右丙号ニ付テハ日本外交文書大正三年第二冊二

五文書ノ附記ヲ、又右丁号ニ付テハ日本外交文書第三十五

卷九六文書附屬書ニヲ夫々参照ノコト

第二 遼西ヲ以テ満洲ニアラズトスル支那側意見ノ根拠

一、支那ニハ由來南満洲ナル名称ナク該名称ハ南満洲鐵道敷設セラルニ及ヒ初メテ使用セラレタル語ナルニヨリ南満洲ナル名称ハ該鐵道附近ノ地域ニ限ルヘキモノナル

居レリ殊ニ南満洲ヲ以テ南満洲鐵道附近ノ地域ニ限ラン
トスルカ如キハ実情ヲ無視セル甚タ謂レナキ主張ナリ
(二) 二付テ

中立局限問題ハ交戦地域ヲ可成狭小ニセントスル趣意ニ
出テタルニ止マリ地理的名称トハ何等關係ナシ又當時ノ
遼西中立問題ノ成行ヲ見ルニ日露戰爭開始ノ当初ニ於テ
帝國ハ露國カ現ニ占領セル地域ヲ以テ交戦區域トナシ其
以外ニ於テハ露國ニ於テモ同様ノ措置ニ出ツル限り清國
ノ中立ヲ尊重スヘキ旨ヲ列国ニ宣言セリ殊ニ清國ニ対シ
テハ先方ヨリ遼河以西露國ニ於テ撤兵ヲ了セル地方ハ清
國政府自ラ軍隊ヲ派遣シテ駐紮セシム各省及内外蒙古ハ
均シク局外中立ノ例ニ照シテ弁理セシメ日露両國ノ兵士
之ニ侵入スルヲ得ス唯満洲中露國軍隊未撤退セサル地方
ハ中立ノ例ヲ實行シ難カラントノ照会ヲ為シ来リタルニ
対シ帝國政府ハ前記列国ニ對スル宣言ト同一ノ主旨ヲ回
答セリ然ルニ其後遼西地方ニ於テ露國カ軍需品食糧等ヲ
徵發スルニ當リ清國官憲カ之ヲ幫助シタル件ニ關シ清國
政府ハ其責任ヲ免レントシテ光緒三十年六月二十五日在
清帝國公使ニ對シ遼河以西ノ奉天省境内ハ清國ヨリ声明

二、日露戰爭中遼西地方カ中立地帯トシテ戰闘地域ヨリ除外セラレタルモノナルコト

三、新条約ニハ南満州ノ区域ニ關スル明文ナキコト

四、満洲ハ長白(長白トハ明末滿洲種族ノ興起シタル地方ナリ)ト同一ナリ而シテ長白ノ広サハ略長白府管内ニ相当ス而シテ満人ハ長白ニ起テ漸次周囲ノ領土ヲ占略シ後年ニ至リ満洲ノ疆域ハ拡張セラレタルヲ以テ遼西地方ヲ満洲トセハ直隸モ満洲ノ内ニ含マルルコトナル訳ニテ

不都合ナル結果トナル

五、元来支那ニハ南満北滿ノ名称ナク唯昔ヨリ遼西遼東ノ語アリテ明朝時代ニ於テ満洲ハ遼東ニ局限セラレタリ

六、東三省全部ヲ以テ満洲ト確定シタルモノナシ

第三 支那側ノ主張ニ対スル反駁ノ根拠

(一) 二付テ

南満洲鐵道ハ南満洲ヲ通過スルカ故ニ其名称ヲ附セラレタルモノニテ南満洲鐵道敷設ノ結果同地方ヲ南満洲ト命名セラレタルニアラス支那側ノ所論ハ原因結果ヲ転倒シタリ

尚其後遼西中立問題ニ付キ清國政府ノ照会ニ対シ在清帝國公使ニ於テ屢々右同様ノ趣旨ヲ声明シタリ

遼西中立問題ノ成行ニシテ斯クノ如クナルニ於テハ遼西カ日露戰爭當時中立地域ナリシ故ヲ以テ満洲ヨリ除外セムトスル支那側ノ主張ハ之ヲ支持スヘキ前提ニ於テ誤解アリト云ハサルヘカラス況シヤ中立區域問題ノ如キハ満洲ノ地域ヲ決定スヘキ標準タルモノニアラス(別紙参考書戊号参照)

(二) 二付テ

新条約ニ明文ナキコトヲ以テ支那側ノ主張ヲ支持スヘキ理由トハナラサルコト叙述ヲ要セス

(四)ニ付テ

長白府ノ管内ハ支那ノ旧府県制度ノ下ニ於ケル朝鮮国境ナル長白府及撫松県、安國県地方ヲ含ムノミニテ斯ル狹小ナル地域ヲ以テ満洲ナリト云フハ実情ヲ無視セル不通ノ議論タリ尚又支那側ニ於テ満人興起ノ地ト共ニ其占略セル地方モ満洲ト称スルモノトセハ遼西ハ勿論直隸モ亦

満洲ト云ハサルヘカラス豈ニ斯カル非理アラムヤトノ意見ナルカ如キモ敢テ遼西カ満人ノ占略ニ帰シタル地方ナルノ故ノミヲ以テ之ヲ満洲ナリト云フ趣旨ニアラス

(五)ニ付テ

明末ニ於テ満洲種族ノ勢力ハ遼河以東ニ在リタルヲ以テ満洲ヲ遼東ニ局限スルコトハ當時ノ解釈トシテハ一應首肯シ得ルカ如キモ當時ノ事態ヲ以テ直ニ今日ヲ律セントスルハ不当ノ所論ナリ殊ニ清朝初期ノ調査ニ係ル欽定満洲源流考ニ依レハ満洲ノ地域ノ西方ハ遼河ノ大凌河、小凌河、医巫閭山等ヲ含ム旨記載シアリ而シテ右大凌河以下ハ何レモ遼西ニ在リ又以テ参考ニ資スルニ足ル

(六)ニ付テ

支那側主張ノ趣旨稍明確ヲ欠クモ東三省全部ヲ明白ニ満

(別紙参考書)

戊號

光緒(西曆一九〇四年)二十年六月二十五日在清帝國公使宛總理外務部

事務慶親王書面ノ一節

(前略)

至遼河以西之奉天境内。雖經本國聲明列作局外。因不能駐兵防守。彈壓尚難偏及。即不能承擔責任。其熱河直隸境內。本國能實中立。地方均確按條規。竭力嚴守。並無任聽俄人招雇人丁。附列號記。屯紮轉輸之事。小庫倫。係熱河界。與遼西之奉境不同。

(後略)

八一三 十一月十五日 石井外務大臣ヨリ
在奉天矢田總領事代理宛(電報)

公判ガ閩東都督府又ハ朝鮮總督府地方法院ニ

テ行ハルル場合ハ中國側ノ臨席ヲ許サザル旨

回訓ノ件

第一二一號

貴電第一九〇号ニ關シ御承知ノ通り新條約第五条ニハ特ニ

日本國領事官ナル文字ヲ用ヒアル位ニシテ領事官ノ行フヘ

キ予審及公判ニハ總テ支那國官吏ノ臨席傍聴ヲ認ムヘキモ

犯罪ノ性質上公判カ閩東都督府又ハ朝鮮總督府地方法院ニ

於テ行ハルル場合ニハ支那側ノ臨席ヲ許スヘキ限リニ非ス

右ハ新條約締結ノ當時我カ領事裁判ニ關スル法律ノ適用上

或ル種ノ犯罪ニ付テハ領事官カ公判ヲ行フ能ハサルコト及

我内國ノ裁判所ヘ條約上ノ権利トシテ支那國官吏ヲ臨席セ

シムルハ我カ國法上ノ精神ニ照ラシ到底認許スヘカラサル

次第ヲモ考量ニ加ヘテ立案セルモノナレハ本件ノ場合ニ於

テモ若シ支那側カ都督府地方法院ノ公判ニ臨席スルコトヲ

要求スルニ在ラハ之ニハ拒絕スルノ外ナキニ付右ニ御含ノ上可然措置セラレ度シ尚予審ニ於テ臨席ヲ許スコトハ刑事

訴訟法上ノ密行主義ニ反スルヤノ疑アルモ所謂密行主義トハ証拏調ベノ便宜ニ基キ單ニ公開セストノ意ニテ予審判事

ノ意見ニ依リ何人ヲシテ傍聴セシムルモ自由ナル次第ナレ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策三閥スル件

八一四

(附屬書)

山田農商務省嘱託報告書

日支新條約ノ効果ヲ發揮セシムル手段ニ就テ

土地商租、自由ニ居住營業、旅行ノ權ヲ獲タリト云フモ満

今般在長春本省嘱託山田修作ヨリ別紙写ノ通報告有之候間御参考迄供御内覽候也

(附屬書)

農商務省商工局長 岡 實

外務省政務局長殿

商第一三一二二号

(十一月二十四日接受)

大正四年十一月二十三日

農商務省商工局長 岡 實

外務省政務局長殿

テ行ハルル場合ハ中國側ノ臨席ヲ許サザル旨

回訓ノ件

第一二一號

貴電第一九〇号ニ關シ御承知ノ通り新條約第五条ニハ特ニ

日本國領事官ナル文字ヲ用ヒアル位ニシテ領事官ノ行フヘ

キ予審及公判ニハ總テ支那國官吏ノ臨席傍聴ヲ認ムヘキモ

犯罪ノ性質上公判カ閩東都督府又ハ朝鮮總督府地方法院ニ

於テ行ハルル場合ニハ支那側ノ臨席ヲ許スヘキ限リニ非ス

右ハ新條約締結ノ當時我カ領事裁判ニ關スル法律ノ適用上

或ル種ノ犯罪ニ付テハ領事官カ公判ヲ行フ能ハサルコト及

我内國ノ裁判所ヘ條約上ノ権利トシテ支那國官吏ヲ臨席セ

シムルハ我カ國法上ノ精神ニ照ラシ到底認許スヘカラサル

次第ヲモ考量ニ加ヘテ立案セルモノナレハ本件ノ場合ニ於

テモ若シ支那側カ都督府地方法院ノ公判ニ臨席スルコトヲ

要求スルニ在ラハ之ニハ拒絕スルノ外ナキニ付右ニ御含ノ上可然措置セラレ度シ尚予審ニ於テ臨席ヲ許スコトハ刑事

訴訟法上ノ密行主義ニ反スルヤノ疑アルモ所謂密行主義トハ証拏調ベノ便宜ニ基キ單ニ公開セストノ意ニテ予審判事

ノ意見ニ依リ何人ヲシテ傍聴セシムルモ自由ナル次第ナレ

一二 大正四年五月ノ日中条約締結後ノ対満施策三閥スル件

一一一

一〇二一

蒙内地今日ノ如ク不穏ニシテ生命財産ノ安全ヲ保護スルノ途無キニ際シ如何ニシテ我国民ハ此新利権ヲ享有シテ滿蒙内地ニ活動スルヲ得ムヤ今日ニ至ル迄何等ノ成果ヲ得サル誠ニ当然ナリト称セサルヲ得ズ、茲ニ於テ乎、滿洲ニ於ケル警察制度及警務顧問ニ關スル細目ノ協定ハ其意義頗ル重大ナリ

一部人士間ニ行ハルル意見ニ拠レハ細目ノ協定ハ事実ニヨリテ解決スヘシ、事前ニ支那当局ト交渉ヲ開始スルモ予定ノ功果ヲ獲得スルコト頗ル困難ナリ何トナレハ事實上滿洲ニ於ケル支那ノ主權ノ一大部分ヲ放棄セシムル程度迄踏込マサレハ滿洲内地ニ於ケル邦人生命財産ノ安全ハ到底保証シ難ケレハ也ト

誠ニ一見識タルヲ失ハサルモ吾人ハ細目協定ヲ事実上ニ於テ解決スルニ足ル事件ガ果シテ近キ将来ニ於テ頻発スル望アルヤ否ヤヲ疑フ、當局者滿蒙發展ノ有望ヲ力説シテ本邦人ノ滿洲内地ニ於ケル居住營業土地商租ヲ勸誘シ蒙古地方農業及工業ノ有望ヲ説明スルモ、警察制度今日ノ如ク、馬賊ノ横行猶依然タルニ於テハ生命ヲ愛スルモノ誰カ之ニ応ゼム、カノ無智ノ徒ヲ驅リテ以テ國家ノ目的ヲ達セムトス

ルガ如キハ到底時勢ト適応セズ
我国若シ上述ノ態度ヲ採ラムカ支那当局ハ以テ我事就レリトシ徒ラニ遷延ヲ事トシ戰雲收マルノ日ヲ俟ツテ以夷制夷ノ慣用手段ヲ講シテ以テ我新利権ヲシテ空文ニ了ラシメムト努ムベシ我国ノ立場ヨリスレハ近キ将来ニ於テ新利権ノ実果ヲ収ムベキ事例發生ノ望無キニモ拘ラズ徒ラニ歳月ヲ空費シテ交渉愈々困難ヲ加ヘムヨリハ寧ロ細目ノ協定ハ速カニ之ヲ開始スルヲ有利トスベシ只其要領タルヤ警察權財政權ノ行使ニ關スル協定ハ之ヲ為サザルヲ可トシ已ムヲ得サレハ出來得ル限り茫漠タラシムベク只顧問ノ聘用ニ対シテハ極力其人數ヲ多カラシメ且ツ其權限ヲシテ広大ナラシムルニ努ムベシ、吾人ノ思惟スル處ニ拠レハ南滿洲東蒙古ニ於ケル新利権ノ活用ヲ見ルト否トハ此顧問ノ權限及ビ其員數ト絶大ノ關係アリト

關東都督ハ奉天ニ移駐スベシ

新利権ノ活用ヲ見バ滿洲ニ於ケル交渉案件ハ頻発スベク之ニ適応スル機關ヲ設クルハ焦眉ノ急務ナリ、日支新條約前後ヲ以テ南滿洲ノ意義ハ多大ノ懸隔ヲ生シタレハ今後猶満洲ニ於ケル外交事務ヲ外務省ニ帰属セシムルハ不適當ノ感

ヲ免レス、真ニ新利権活用ノ日來ラハ事務繁忙ノ一事ヲ以テスルモ外務省ハ之カ為メニ別ニ一局ヲ設クルノ必要ヲ生

セム吾人ノ見ル処ヲ以テスレハ南滿洲ノ如キ特別ナル狀態ニ在ル地方ノ外交事務ハ特別ナル機關ヲシテ處理セシムル

ヲ妥当トシ中央政府ハ只其大綱ヲ掌握スレハ足レリ此意味ニ於テ閑東都督ハ旅順ヨリ出テ奉天ニ移リ殆ント存在ヲ

認メラレサル都督ノ外交権ヲ拡大シ南滿洲ニ於ケル外交権ヲ挙ケテ之ニ帰属セシムベキナリ、近時朝鮮總督ヲシテ南

滿洲ノ事ヲ行ハシムベシト論スルモノアレトモ是レ支那人ノ心事ヲ了解セサルヨリ來レルモノニシテ朝鮮ノ二字以テ日支國交ヲ疎隔セシムルニ足ルヲ知ラサルノ論到底用ユベカラズ

開市場増加ノ必要

輸入正税ヲ支払ヒタル外國品ヲ滿洲各地開市場ニ輸送スル場合ニハ免稅單ノ發給ヲ得テ沿途一切ノ税厘ヲ免セラル、サレハ南滿各地何レノ処ヲ問ハズ自由ニ居住營業ノ權利ヲ得タル今日ニ於テモ開市場ヲ增設スルノ利益ハ之レカ為メニ毫モ減少セズ成ルベク多クノ開市場ヲ作ルハ貿易振興ノ捷徑ナリ

一一一 大正四年五月ノ日中條約締結後ノ對滿施策ニ關スル件 八一五

合八円滿ナリトノ趣ニ有之當館ニテハ本件ニ付未タ何等聞込ミタルコト無之候得共為念此段報告申進候 敬具

一〇一四

八一五

日本外交文書

大正四年
第一冊

終

附錄 日本外交文書 大正四年第二冊 日附索引